

### 学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学, キャリアデザイン学部学生サポート委員会

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

15

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

109

(終了ページ / End Page)

160

(発行年 / Year)

2018-03

## 学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

「学生活動サポートプログラム」は、キャリアデザイン学部の理念に基づき、キャリアデザイン学およびキャリアデザインの実践を推進するために、学生が主体となって企画・運営するさまざまな活動に対して助成を行う制度である。本年度は13団体から申請があり、書類の記載上の瑕疵等により若干の減額が生じたケースが幾つかあったものの、基本的にはすべてのプログラムが助成の対象として認められた。

活動の内容は、キャリアデザイン学部を構成する三つの領域、すなわち発達・教育キャリア、ビジネスキャリア、ライフキャリアのそれぞれをまんべんなくカバーするものとなっている。以下に各々の活動の成果報告を掲載する。

学生たちは、こうした活動を通して、キャリアとはなにか、キャリアデザインとはなにかについて、具体的な現場における体験を通して考察や理解を深めていくことが期待される。と同時に、公的な助成金を活用してアクションを起こすことの意義や責任を学ぶ貴重な機会ともなっている。今後も多くの団体から、学生らしいユニークで新鮮な発想による企画の応募が寄せられることを望んでいる。

なお、本プログラムの助成は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されている。ここに記して感謝申し上げます。

(学生サポート委員長 荒川裕子)

# 離島の中学生へのキャリア支援プログラム

代表者：遠藤ゼミ 松浦春香

## 1 実施概要

離島である伊豆大島に出向き、3日間という短い期間ではあったが中学生との交流を通してキャリア支援を行った報告を行う。

対象としたのは大島町立第一中学校と大島町立第二中学校の2校に通う中学1～3年生である。

**準備期間：2017年7月1日(土)～8月26日(土)**

8月4日(金) 活動参加者顔合わせ、事前打ち合わせ

8月7日(月) 各中学校との話し合い(活動内容の確認等)

8月8日(火) 宿泊先の下見

8月11日(金) キャリア支援講義打ち合わせ

8月23日(水)～24日(木) 必要物資の調達、郵送

**実施期間：2017年8月27日(日)～2017年8月30日(水)**

8月28日(月) 現地調査

- ・第一中学校：午前中は先生方の計らいで、中学生と大学生との交流の機会を作ってくださいました。ここでは、自己紹介や伝言ゲームといった簡単なレクリエーションを行った。午後からは部活動のサポートを行うことで中学生と交流をした(ボール拾い、準備・片付けの手伝い、ランニングの引率等)。
- ・第二中学校：午前中は、夏休みの宿題を行う中学生に対し、わからない問題や行

き詰っている生徒に対する学習面のサポートを行った。各教室に大学生2～3名が分散し、各学級の先生を含めた3～4名体制で学習補助にあたった。午後からは、大学生が2～3名ずつにわかれ、部活動のサポートを行った(ボール拾い、球出しやアドバイスといった軽いコーチング指導、準備・片付けの手伝い、ランニングの引率等)。

8月29日(火) 現地調査

- ・第一中学校：翌日のキャリア支援活動を念頭におきながら、「自己診断」や「適性診断」を行った。午前中いっぱい上記の活動を行い、午後は部活動サポートにあたった。中学生・大学生ともに新たな関係性を築く機会を作ることを目的に、前日(27日)とはサポートメンバーを入れ替えた。
- ・第二中学校：午前中の学習の時間を少しいただき、キャリア支援を行った。具体的には、少人数(5～6名)でグループを作り、「自己分析」や「価値観ワーク」「適性診断」などに取り組んだ。その後は部活動までの時間で学習サポート、午後に部活動のサポートを行った。第一中学校とは異なり専門のスキル(テニスや野球など)を必要とする活動もあったため、こちらではメンバーを入れ替えずに活動を行った。

8月30日(水) 現地調査

- ・第一中学校：午前中は2時間ほど学習の時間のサポートを行った後、3時間程度時

間を使いキャリア支援活動を行った。中でも、自分の適性と価値観を照らし合わせて考えられるよう、「価値観ワーク」を重点的に行った。人数が少なかったため、ほぼ大学生と中学生が1対2、もしくは1対3という形でサポートすることができた。午後は、午前中の活動で見出した「なりたい自分」を中学生にイメージしてもらいながら、大学生による講義を行った。第一中学校で講義を行った大学生は教員を目指していたため、これまでの進路選択の理由に加え「なぜ教員になろうと思ったのか」目指す理由も含めた講義を行った。できる限り質疑応答の時間を設け、帰京した。

- ・第二中学校：午前中まるまる時間をいただくことができたため、前日のキャリア支援活動の内容を踏まえ、第一中学校と同じく大学生による講義を行った。主な内容は、これまで自分がどのように進路選択を行ってきたか、そして、その中の苦労や得たものなどについてである。就職先まで確定していたため、これまでの進路選択に加えて「自分はどんな将来のビジョンをもって就職しようと考えているのか」についてまで伝えた。午後は部活動のサポートを時間の許す限り行い、船で帰京した。

実施場所：大島町立第一中学校（東京都大島町元町字小清水）  
大島町立第二中学校（東京都大島町岡田字長岡 113）

宿泊場所：フレンドハウス<大島>、カプセルホテル伊豆大島

報告書作成期間：2017年11月～12月末

報告書提出：2018年1月26日（金）

その他  
特になし

## 2 結果・意義・所見

本企画の意義を述べる前に、簡単に大島の子どもたちが生活している環境について述べる。

今回訪れた大島で生活している子どもたちは、幼いころからとても狭い環境・コミュニティの中で生活している。大学もなく、キャリアモデルとなるはずの大人は島外へ働きに出てしまう。加えて、限られた産業の中で育つ子どもたちにとって、大島の環境は将来へのビジョンが描きにくい環境であるということが言える。また、大島には高校があるものの、入学倍率が1倍を切っている。つまり、中学生たちが進学するにあたって、学習せずとも入学できる状況だ。よって、学習意欲をも持ちづらい環境であるとも言える。

そこで本企画では、今後の自分の進路について中学生の彼らが考える一つのきっかけとなることを目標に、キャリア支援を主な目的として、さまざまな活動を行った。

今回私たちが行った具体的な活動は主に3点ある。

第一に、中学生たちの学習支援を行った。具体的には、生徒たちが課題に取り組んでいる中、行き詰っている様子が見受けられた生徒に学生が声をかける問題解決のサポートや、集中力が欠けてきている生徒への声かけなどである。第二に、部活動の支援である。夏休み期間ということもあり、中学生たちは学習時間の後、部活動を行っていた。私たち大学生は数人ずつに分かれ、部活動のサポートも行った。これは三日間を通して行ったこともあり、中学生たちと私たち大学生の間の心理的距離感を縮めることができたと考えている。そして第三に、

中学生たちに対するキャリア支援を行った。中学校で決められていた学習の時間を三日間数時間ずつ、もしくはまるまるいただき、中学生たちのキャリア支援につなげるための「自己分析」や「価値観ワーク」、「適性診断」などを行った。加えて、就職先が決定している大学生と、現在高校教諭になることを目指している大学生の2名が、大学生を代表して中学生に向けた講義を行った。

これらの活動を行った結果、以下4点が本企画で挙げられた成果である。

## 1. 大島の中学生たちと、外部の大学生たちとの交流による関係性の構築

中学生という多感な時期の彼らにとって、中学校の先生方、自身の両親、近所に住む大島の大人以外の「外部」の人間かつ、中学生たちと年の近い大学生とのコミュニケーションは様々な影響を与えた。

例えば、島の中学生たちは、お互いがどこに住む誰か、なんとなく知っていたり、教師がどの生徒がどこに住んでいるのか把握しているなど、親密性の高いコミュニティで暮らしてきた。このように、幼いころからの成長を島民全体で見守っている、という環境は、とても良いものに思える。しかし、慣れた人間関係の中だけで暮らすことは、必ずしもプラスだけではないだろう。そこで、大学生と交流をすることで、新しい価値観との出会いや初対面の人とコミュニケーションをとる機会を作ることができたのではないだろうか。

## 2. キャリアビジョンの設計の一助

前述にもあった通り、今回は「自己分析」や「価値観ワーク」「適性診断」に加え、大学生による講義も行った。中学校の事情との兼ね合いもあり、対象は中学3年生に絞って行った。

講義後集めた中学生からの感想には「ど

んなふうに生きてきたのかよく分かった。」「自分と年の近い大学生からの話で親近感がわいた。」「いろんな選択肢があることを知った。」などといった将来への前向きな感想から、「自分も何になりたいかきちんと考えなければと感じた。」といった焦燥感を与えたような感想まで、内容はさまざまだったがとても前向きな感想を受け取ることができた。中学生にとって、自分と年の近い存在から自らのキャリアモデルを直接伝えられる経験はかなり限られているだろう。そういった意味で、今回の講義で中学生がビジョンを設計するための一助になれたのではないだろうか。

## 3. キャリアビジョンの必要性の再認識

キャリア支援のための様々な活動を行う中で、中学生である彼らの実情を把握することができた。具体的に将来のビジョンを描くのは、都心で生活する大学生の私たちでも容易なこととは言えない。しかし、都心で生活している私たち大学生は、身近にいる社会人や先輩の存在から刺激やキャリアモデルビジョンを提示してもらうチャンスが多くある。大島の場合、キャリアモデルとなる大人は働くために島を出てしまうケースがほとんどであり、都心で生活している私たち大学生に比べ、キャリアモデルとなる存在が圧倒的に少ない。ゆえに、キャリアビジョンが描きづらいといえる。

また、部活動のサポートを行う中で、中学生と休日の過ごし方や将来・進路のことまでざっくばらんに話をすると、様々な事情を中学生との会話から垣間見ることができた。学習面の話では、数人は島外の高校進学に向け勉強しているが大多数はそのまま島の高校へ進むことを話してくれた。「ほぼ持ち上がりのようなもん。」「別に勉強しなくてもいけるし、だったら部活頑張りたいし。」「なんで島外の高校を受験したいと

思うのかわからない。」「〇〇は家が厳しいから受験するんだ。」といった声を聞いた。この話からは、キャリアモデル云々以前に、学習に対する意欲もなかなか持ちづらい環境であることがよくわかった。

キャリアビジョンは、将来に向けて自分が何に力を入れて努力していくべきかを明確にするための重要なモデルである。いわば原動力だ。そして、その原動力を突き動かす一つの要素は、学習意欲ではないだろうか。大島の中学生たちは、学習意欲を持ちづらい環境にいて、自分の将来を決めねばならない時に適当な行動をとるのが難しくなるのではないだろうか。実際、キャリア支援活動中も、何が自分にとって大事にしたいものなのか、将来自分は何をしたいのか、イメージを膨らませることに難航している中学生が多々見られた。この様子からも、中学生にとってのキャリアビジョンの必要性を再認識することとなった。

#### 4. 島の皆様との関係の構築

成果の1つ目で述べた通り、大島は規模が小さく、中学生たちはこれまで親密性の高いコミュニティで暮らしてきた。そのため、私たち大学生が三日間中学校を訪れどんな活動を行っているかは、先生方のみならず中学生の親御さんにもすぐに把握していただくことができた。そして、今回私たちが行ったキャリア支援のための活動について、「(息子・娘が)こんな感想を持っていた」「楽しかった」等、多くの前向きな評価をしていただくことができた。短い期間ではあったが、私たちの活動についてポジティブな印象を持っていただくことができたと言えるだろう。

今後も引き続き、大島の中学生たちのキャリア支援をしていくにあたって、島の方々との関係性の構築は必要不可欠であったと考える。

# 小学校での児童と教員間を縮めるボランティア活動

代表者：遠藤ゼミ 渡辺日南子

## 1 実施概要

本企画は、伊豆大島にある小学校（東京都・大島町立さくら小学校）へ定期的に訪問し、当該小学校の教育課題である「進路選択の幅が狭いことによる児童の学習意欲の低下」を、大学生との交流によって改善することを目的としている。

○対象施設…東京都大島町立さくら小学校

○事前調査 2017年5月1日（月）～5月31日（水）

小学校の基本情報、先生方との事前の打ち合わせ（日程の調整・大学生の参加人数の確認・児童の様子・地域色など）から得られたことをまとめた。それらを参考にゼミ生それぞれがある係になり（レクリエーション企画、物資調達、会計）具体的なレクリエーションを企画するなどの事前活動を行った。

さらに、小学校の先生方との打ち合わせから得られたことを参考に、大学生がディスカッションを通して、子どもたち・先生方とどのように接していくか、また、このボランティア活動で何を得心かについて共通認識を持つようにした。

○実施期間 2017年8月28日（月）～8月30日（水）、10月1日（日）

○実施概要

8月28日（月）

大島町立さくら小学校（現地調査）

・午前中…学習・水泳指導補助

学生が二手に分かれて指導した。学習補助は児童が持参していた夏休みの課題を中心に指導の補助を行った。水泳指導は児童の進捗状況に合わせて、泳ぎが苦手な子どもを中心に大学生がマンツーマンで指導を行った。

・午後…校内清掃、学習ブースの作成

小学校側の依頼で、古い備品の運び出しと教室のレイアウト変更を行った。その後、一つの空き教室を児童の新しい学習スペースとすることとなり、掲示物の作成、教材となるプリントの選定とコピー、設置を行った。

8月29日（火）

大島町立さくら小学校（現地調査）

・午前中…学習・水泳指導補助、レクリエーション

学習・水泳指導補助は昨日同様。レクリエーションでは大学生が運営を務め、児童は低学年と高学年に分かれて準備していたレクリエーションを行った。

・午後…プール清掃

小学校側の依頼で、保護者用の駐車場の設置、プールの清掃、プール周辺の草取り等を行った。

8月30日（水）

大島町立さくら小学校（現地調査）

水泳記録会記録員として児童のタイムを計測・記録した。記録会に伴い、テントや

児童の休憩スペースの準備・後片付けを行った。

10月1日(日)

大島町立さくら小学校(現地調査)

当該小学校で開かれた運動会に参加。児童誘導などの補助、競技の見学を行った。

#### ○調査担当

久治健人、宗形智史、西原麻里子、中川晴香、貝美波、井出大介、小島日出子、舟山未来、平岡優衣、林風輝、小林歩乃佳、栗田侑果

#### ○報告書作成

日程：12月11日(月)

ボランティアで得られた知見や児童の生きづらさに着目した考察を報告書にまとめた。

報告書の印刷、製本を全員で行った。

#### ○報告書提出

1月26日(金)

報告書を学校へ提出する担当：小林歩乃佳

報告書を大島町立さくら小学校へ直接提出する予定である。

#### ○その他

報告書作成のため、現地調査では大学生が児童とのかかわり、または児童の様子を事例として記録した。帰京後、大学生が記録した事例をまとめ、ゼミでのディスカッションなどを通して相互に検討しあった。

さらに、教員の指導も受けながら、問立てをし、先行研究の検討も交えて大学生の見解として調査の結果を示した。

## 2 結果・意義・所見

本企画は、伊豆大島にある小学校(東京都・大島町立さくら小学校)へ定期的に訪問し、子どもたちの授業補助や課外の学習ボランティア、そしてレクリエーションを実施するものであった。当初予定していた児童への個別の学習指導のみならず、小学校側からの依頼により、水泳指導員、水泳記録会の記録委員としても大学生が児童達と関わる機会を得ることができた。また、8月28～30日に行った宿泊ボランティアだけでなく、10月1日に日帰りボランティアも実施した。帰京後は、大学生各自が報告書の作成を行った。そして、大学生が作成した報告書をボランティア活動先の小学校の先生方に読んでいただくことで、今後の指導の発展や児童自身の困難さの緩和に貢献すべく、報告書を提出する予定である。

ボランティア活動から得られた点は4つある。

1つ目に、狭いコミュニティが故の生きづらさが実際に見受けられたことだ。伊豆大島という「狭いコミュニティで過ごしている児童が、その環境が故に生きづらさや困難さを抱えて生活しているのではないか」という推測のもと、ボランティア先を大島町立さくら小学校に選定した。ボランティア活動を経て、推測していた「狭いコミュニティで生活するが故の生きづらさや困難さ」が児童とのかかわりから見られた。2つ目に、学生から児童への学習指導やレクリエーションを通じて、児童・教職員・学生と三方向それぞれの関係に良い影響があった。3つ目に、実際の教育現場にはいりこんだことで、教職員の方と直接コミュニケーションを取り、教育現場がかかえる問題点を見つけ出せることができた。4つ目に、伊豆大島ならではの、保護者や地域の方と学校の結び付きの強さを感じ、地域と学校の



連携がプラスにはたらく点を感じることができた。

これら4つについて、報告書にまとめたことを以下で詳しく示す。

## 1. 狭いコミュニティが故の生きづらさ

### ・学習面

1学年に1クラス、おおよそ20人ほどの規模であることから、児童同士の学び合いは可能であるが、学力の差に開きがあることは否めなかった。集中力が続かない児童は大学生が個別に対応することで、改善の見込みが生まれたと考えられる。

個別に指導する中で、特に集中力が続かない児童は学習意欲が低下しており、具体的な目標（2ページ課題を解き終わったら大学生に2つ質問できる、など）を決めることで意欲を高められることがわかった。

### ・運動面

海に囲まれた島に学校があることから、児童の水泳への参加はほぼ強制であった。泳ぎが得意な児童は自主的に練習ができ、学生の補助はほとんど必要がなかった。いくら島で生まれ育ったとはいえ、泳ぎが苦手な児童もおり、他の児童と自分を比べ落ち込んでしまう児童が見受けられた。そういった事情をかかえる児童は水泳が得意な学生が個別に対応した。顔を水につけるのがどうしても苦手、足を伸ばすべきところで伸ばせないなど、課題は様々であったが、単にやり方を教えるのではなく、児童がイメージしやすいように体を使って指導すると効果があることに気付いた。

### ・生活面

狭い規模での学校生活は、児童同士が全員顔見知りという良い面が表れていた。しかし、レクリエーションで小さいケンカになってしまった際、当事者の児童同士の関係が悪くなってしまうだけでなく、その周りに悪い影響や空気がかなり短時間で広

がってしまうことがあった。最終的には教員の方と学生が連携して場を収めることができた。こういった地域の特徴に鑑みて、丁寧な対処を心がける必要があることがわかった。

## 2. 相互的な良い影響

### ・児童と大学生

教職員の方よりは年が近い大学生がかかわることで、普段教職員の方には見せない顔や相談をもちかけられることがあり、児童と良い関係が結べたのではないかと考えられる。最初は児童と大学生とお互い探り探りの様子があったが、特に低学年の子どもたちはお気に入りの大学生を見つけ、名前で呼び合ったりする姿が見受けられた。

### ・教職員と学生

学習、水泳指導が終わり、児童が帰宅したあと、学生はボランティアとして校内の清掃や水泳記録会・運動会の準備、片付け、児童の学習意欲向上のための特別学習ブースの作成に取りかかった。先生方が学生側の意見を取り入れてくださったことで、新しい学びの場をつくるお手伝いできたと考えられる。また、学習指導の助言を逐一教職員の方からいただいた。その結果、普段子どもたちとかかわることが少ない大学生は、子どもたちへの接し方を、普段から子どもとかかわる機会がある大学生は、具体的な学習指導方法を、それぞれ学ぶことができたと考える。

### ・児童と教職員

大学生が双方とかかわることによって、児童と教職員の間で大学生の話題が増えることが増え、新しい話題や距離を詰める一助になったと考えられる。一方、児童と教職員の方は長く共に生活していること、さらに教職員の方の熱心な指導があることから、強い信頼関係で結ばれていることが理解できた。

### 3. 教育現場の問題点

学生が教職員の方と直接コミュニケーションを取り、得られた問題点は①少人数ならではの授業形態がクラス間で差があること、②人材不足、③児童の学習意欲の低下、これらの3点にあると考えられる。特に児童の学習意欲の低下は、今回の訪問による大学生という人手があったことで、改善の見込みが得られたが、元の学級に戻ったとき、一人一人の手厚いサポートをするのは無理があるため、根本的な学習意欲の底上げをどのようにしていくかは大きな課題であると感じた。

### 4. 地域の中の学校

水泳記録会や運動会では、児童の保護者だけでなく、地域のお年寄りが多く来校されていた。ボランティアに伺った大学生は

比較的首都圏で育った学生が多く、「開かれた学校」を肌で感じ、新鮮な感覚を味わうことができた。水泳記録会や運動会では児童の保護者や地域の方が、我が子でなくても、まるで我が子のように応援する姿や、教職員の方の計らいで大学生紹介をした際には温かく迎えてくださった。こうした地域や保護者同士のつながりが、児童のモチベーションにつながっていることがわかった。

こうした姿がごく自然に見られたのは、小学校側が「開かれた学校」にする取り組みがなされていたからであることもわかった。情報公開や、保護者・地域の方との丁寧なコミュニケーションがなされていることにより、信頼関係へとつながり、それが児童にも良い影響をもたらす、という新たな発見が得られた。

# 未来のための「きっかけづくり」「動機付け」を応援したい ～ SIGNAL プロジェクト 2017～

高大連携プロジェクトチーム SIGNAL/ 長沼和也 (2年)

## 1 実施概要

本団体では、主に高校生へのキャリアサポート活動を実施している。毎年、4高校－浦和学院高校・千葉黎明高校・村田女子高校・足立西高校－を中心に年7回ワークショップを行う。今年度については栄北高校とも2回のワークショップを行った。会場については、本学で行う場合と対象となる高校で行う場合とがある。以下、詳細を記す。

### 【メンバー構成】

4年生…7名 3年生…10名 2年生…7名  
1年生…11名 以上全35名  
団体代表 和田隼人 (3年)

### 【概要】

本団体は、キャリアデザイン学部生のメンバーで構成されている。「キャリア教育」「高大連携」「ピアサポート」の3つを軸に、主にワークショップを使ったキャリアサポート活動を、企画運営を通し高校での課題解決を実施している。また、発足当初より掲げている「きっかけづくり」「動機づけ」を常に意識しながら高校生と交流を続けている。さらに、高校生への「きっかけづくり」だけではなく、私たちキャリアデザイン学部生が学部での学びを活かし、それをこの活動を体験することで深めていくこと、私たち自身のキャリアについても向き合うことを意識して活動している。

### 【実施活動】

#### ○定例会

月に2～3回行うミーティングである。全メンバーが原則参加としている。話し合う内容は、高校との企画の進捗状況・諸活動の反省及び改善策・ワークショップの勉強会などである。原則参加であるが、出席率が毎回5割前後であることが問題点であり、参加者もいつも同じ顔ぶれとなっている。この問題は、高校生とのワークショップにおいて大学生のファシリテーターとしての質に差ができてしまい、それが全体の統制の取れなさにつながっているため、改善を急いでいる。

#### ○キャリアサポート活動

##### \*実施時期と場所

- ①浦和学院高校 (埼玉県さいたま市) →  
6月 (本学) 10月 (浦和学院高校)
- ②千葉黎明高校 (千葉県八街市) →  
7月 (本学) 4月 (千葉黎明高校)
- ③村田女子高校 (東京都文京区) →  
12月 (本学) 3月 (村田女子高校)
- ④足立西高校 (東京都足立区) →  
3月 (足立西高校)
- ⑤ 栄北高校 (埼玉県北足立郡伊奈町) →  
6月 (栄北高校) 9月 (栄北高校)

##### \*当日までの流れ

あらかじめ各高校の先生との連絡係を設置、企画の約2～3ヶ月前から連絡を取り始める  
↓  
この連絡で日時や高校側からのニーズを聞

くと同時にコアメンバーを集める（約1ヶ月半～2ヶ月前）

↓

ニーズをもとに企画の目的とワークショップの大まかな形を決定する（約1ヶ月半前）  
（ワークショップはキャリア教育プログラムやグループワークスキルを参考にする）

↓

コアメンバーのミーティングと定例会でのロールプレイでワークショップを完成させる（1週間前）

↓

リハーサルを行い、必要な備品などを準備する（1週間前）

**\*当日の流れ**

高校の先生へのあいさつ、高校生とのコミュニケーション

↓

アイスブレイク

↓

ワークショップ（大学生ファシリテーター1名対高校生約4～7名）

↓

高校生から感想、高校の先生から総括をいただく

↓

大学生のみで反省ミーティング

**\*企画後**

- ・ 高校生に記入してもらったアンケートを集計して、メールで高校の先生にデータとお礼の文を送付する。
- ・ 再度反省ミーティング（全体参加者の反省点とコアメンバー内での反省点）

**【まとめ】**

本団体は、高校でのキャリアサポート活動とその準備を中心に活動している。活動が立て続けにあるなど大変な時期もあるが、

近年はメンバーの増加もあり、分担することができている。活動の延長として、私たち自身のキャリアについても考える機会やキャリア教育について話し合う機会を定例会などで設けて、活動の質的向上をはかっている。

**2 結果・意義・所見**

以下で本年度における活動の報告と成果を述べる。

**【ヒアリング】**

プログラムの企画準備の前に、各企画責任者が高等学校の担当教員に対し、プログラムの方向性や参加人数などのヒアリングを行い、高校側のニーズに基づき、企画準備を進めた。高校側のニーズは多様であったが、一年生対象のプログラムには自分の価値観を明確にするものや大学での学びがイメージできるものが多く、二年生の終わりには学部選択や社会とのつながりが意識できるものが多いなどの特徴がみられ、それぞれの学年に合った内容をニーズとして挙げていた。どの高校も生徒のキャリアデザインに対して積極的な姿勢を持っており、キャリア教育の認識の広まりを感じた。

**【企画準備】**

企画準備として、各企画のコアメンバーを中心に週2,3回のミーティングを企画実施日の約2か月前から行った。以下は主なプログラム作成の流れである。

1. ヒアリング結果・ニーズの共有  
代表者が高校教員へのヒアリングを行った結果を全体で共有し、高校生の参加人数やニーズを把握する。
2. 企画目的・ワーク目標の設定  
高校側のニーズに沿って、企画全体の目的（ねらい）とワークショップで意識す

る目標をそれぞれ設定する。高校生が目的・目標を常に意識し、ワークショップに取り組めるよう、なるべくわかりやすく簡潔な言葉にまとめた。

(例) 学習したことから、身についた力を考えよう

### 3. ワークショップの作成

設定したワーク目標に沿って、プログラムの核となるワークショップの内容を考える。前までは、価値観アイランドや6人の人生、RIASECなどの既存のワークを行っていたが、前年度からはほとんど自分たちのオリジナルで一から作成しており、今年度も引き続きオリジナルのワークを作成し行った。

### 4. アイスブレイクの作成

プログラムを行うにあたって、大学生と高校生及び高校生同士の緊張感をほぐすためのアイスブレイクを考える。単に緊張感をほぐすだけでなく、お互いの名前を覚えられるものやワークの導入になるもの、話しやすい雰囲気になるものなどの工夫を凝らし、ワーク同様、今年度もオリジナルのものが多かった。

### 5. ロールプレイ・修正

企画の流れの確認と、ワークショップのロールプレイを行う。ロールプレイは実際の高校生を想定して、より企画当日の流れが意識できるようにする。ワークを実際に行ってみて、問題のある箇所を洗い出し、修正を加えたり、変更をしたりして再度ロールプレイを行う。この流れを何度も行い、企画全体のブラッシュアップを図る。

以上の流れに加えて、企画の進行表やワークマニュアルの作成、その他備品準備など、企画当日に向けて不備のないよう準備を進めた。今年度は新しく様々なワークが生まれ、学生にとっても自身の企画力・キャリア教育への認識を高めることができた。

## 【企画実施】

企画当日の成果として客観的評価の観点から振り返ると、高校生に行ったアンケートにおいて、多くのポジティブなフィードバックを得ており、これからの自己と他者のかかわりについて考えるきっかけになったのではないと思う。また、高校の担当教員からも同様に高評価をいただいた。

しかし、高校生に対するアンケートの「大学生に質問したいことを質問できたか」という項目については、他の項目に比べ、ネガティブな回答が多かった。これは企画構成上の問題とコミュニケーション上の問題があると考えられる。企画構成上の問題としては、ワークの目的・目標に縛られすぎて、高校生との自由な会話の時間をあまり取れず、かなり内容が詰まったものであったと感じた。今後は高校生の質問に答えるしゃべり場などを取り入れるなど、直接的に将来を考えたり、自分の価値観を知ったりといったことだけでなく、大学生とのかかわりも大切にしていきたい。コミュニケーション上の問題としては、高校生がいきなり会った大学生に質問をするにはかなり勇気が必要だということである。しかし、ここにおいて大切なのは、いかに大学生が高校生に対して話しかけやすい態度をとり、グループ内全員とまんべんなく会話ができるかどうかである。大学生と高校生との間で信頼関係（ラポール）を築くことによって、高校生の中にある自由な発想や質問を引き出し、プログラム全体の満足度を高めることになる。今後は、大学生のファシリテーション能力の向上のために、定期的なロールプレイや研修などを行っていきたい。

## 【活動全体の振り返り】

本活動を行っていく中で、企画力・コミュニケーション能力・キャリア教育に関する知識を高めることができた。本活動は実際

に高校に行き、キャリア教育の実態を肌で感じる事ができるため、高校生が抱えているキャリアに関する不安や取り巻いている環境を高校生の視点に立って考えることができた。提携している各高校は、入学から卒業までの3年間を通して、生徒のキャリアデザインの支援を段階的に考えており、SIGNAL以外の学生団体との交流や大学見学、社会人の方の講演会などを積極的に行っていた。またそれらの活動を単発で行うだ

けで、キャリア教育プログラムをイベント化してしまうのではなく、キャリアに関する学習を普段から行い、振り返り学習もしっかりと行っていた。こういったキャリア教育に熱心な高校とかがかわることができるのは、非常に光栄でめったにないことであるため、今後も引継ぎをしっかりと行い、提携を継続していきたい。また、今年度は新たな高校との企画も行うことができ、より本団体の成長につながったと考える。

# 合併を選択しなかった村を支えている I ターン・教育・福祉について調査する

代表者：金山ゼミ 小山内萌

## 1 実施概要

私たちは、長野県大鹿村の調査を行った。大鹿村は、平成の市町村合併で合併をしなかった小規模自治体の事例として、金山ゼミは昨年から調査を続けている。昨年の調査では、村民の多くが「合併をしなくて良かった」と思っていることが分かった。村のことについて、行政に頼らずにそれぞれが役割を持つことで前向きに生活する様子を感じられ、非常に大きな収穫であった。

そこで今年度の調査は、合併を選択しなかった大鹿村は村の力でどのように生活をしているのか、その現状を具体的に探ることとした。いろいろな切り口がある中で、今回の調査は福祉と教育をテーマに設定し、ヒアリング調査をすることにした。この2つをテーマにした理由として、昨年の調査において、福祉関係についてはNPO 法人の活動を知ることができたため、役場サイドの取り組みに興味を持ったため、また教育関係については、一村一校の小・中学校の小規模教育の取り組みを知りたいと思ったためである。

合併をしなかった大鹿村の教育と福祉を中心に村の現状を調査するために、大鹿村の8施設、団体を対象に調査し、また、大鹿村でのフィールドワークを行い、報告書にまとめた。対象施設は、中央構造線博物館、ろくべんかん、赤石荘、観光協会、佐倉屋商店、大鹿村役場、大鹿村立小学校・中学校である。

日程 2017年5月13日～15日（3日間）

・大鹿村での現地調査

5月13日

中央構造線博物館  
ろくべんかん

現地調査  
現地調査 職員への  
ヒアリング調査

赤石荘

現地調査 主人への  
ヒアリング調査

5月14日

観光協会

現地調査 職員への  
ヒアリング

商店主・村議会議員

鹿塩地域・大河原地域

現地調査 村民への  
ヒアリング

赤石荘

現地調査 主人への  
ヒアリング

5月15日

大鹿村役場

現地調査 担当者への  
ヒアリング

大鹿村小学校

現地調査 校長・教  
頭へのヒアリング

大鹿村中学校

現地調査 校長・教  
頭へのヒアリング

調査担当

小山内萌 担当：鹿塩地区、大鹿村小・中  
学校

押切飛鳥 担当：鹿塩地区

結束里菜 担当：商店主・議会議員、鹿塩

地区	
関根瑠	担当：大河原地区
曾川美咲	担当：大河原地区
田中亜季	担当：鹿塩地区
戸澤侑馬	担当：観光協会、鹿塩地区
中原拓海	担当：大河原地区、村役場
橋川彩子	担当：大河原地区
百瀬萌	担当：大河原地区

・報告書作成

日程 2018年1月23日

大鹿村に提出する報告書の印刷、製本 担当：全員  
 調査をふまえ、具体的な提言を全員で考察し、報告書としてまとめた。  
 報告書の印刷、製本を行った。

・報告書提出

日程 2018年2月中旬(予定)

大鹿村に報告書を提出する。 担当：曾川  
 報告書を大鹿村へ郵送で提出する予定である。

・その他

フィールドワークまでに、大鹿村の歴史や観光、村の情報などの事前調査を行った。また、大鹿村の伝統芸能の一つでもある大鹿村歌舞伎に対する理解を深めるために、ゼミの時間に『大鹿村騒動記』の鑑賞を行った。

## 2 結果・意義・所見

事前調査で分かった評価を基に、現地でのフィールドワーク、ヒアリング調査を行った。

大鹿村の教育と福祉の質問を必須とし、さらに大鹿村に深く関わりを持つキーパーソンとなる方々に様々な立場からヒアリング調査を行った。赤石荘の主人へは、村民

の視点からの大鹿村での生活、子育て、村歌舞伎、リニア、環境問題、学校教育についてと様々な面でヒアリング調査を行った。観光協会へは行政の視点からのリニア問題、村歌舞伎、まちづくり、村の自然、観光業についてヒアリング調査を行った。佐倉屋の主人と村議会議員からは、Iターンで移り住み長年暮らしている立場として村民との関わり、村会議員としての大鹿村の課題、村の伝統芸能としての村歌舞伎、村民との距離についてヒアリング調査を行った。大鹿村小学校からは、生徒数の問題、村歌舞伎、村民の子どもとIターン者の子どもの関わり合い、学校行事についてヒアリング調査を行った。大鹿村中学校からは、生徒数と男女比に関する問題、村民の子どもとIターン者の子どもの関わり合い、村歌舞伎の学習、学校行事、部活動、学習における問題点についてヒアリング調査を行った。そして大鹿村役場へは行政の面から見た強み、福祉サービス、医療問題、福祉に関する雇用問題、Iターン者との関わり合いなどについてヒアリング調査を行った。

大鹿村における福祉と教育の実状を把握するためには、村役場(健康・福祉担当者)や小中学校・教育委員会(教育関係者)へのインタビューが有効であると考えられるが、今回は客観性を高めるために、村議会議員、旅館・観光事業者、商店事業者へのヒアリング、Iターン・Uターン者を含む村民への現地インタビューを行った。そして、ヒアリング調査のもとで浮かび上がってきた福祉と教育に関するキーワードに対して、今後の村の活性化のためにSWOT分析を行った。また、クロス分析をすることで、そこから発見できる提言を報告書にまとめた。報告書を大鹿村に郵送し、大鹿村の方に読んでもらうことによって、自らの村について知り大鹿村に還元する役割もふまえている。



以下は報告書の評価である。今回は、福祉と教育に焦点を当てたものに絞ることとする。

#### 【福祉】

〈強み〉大鹿村の福祉事業やサービスの強みは、人口が1,000名程度と少ないが、逆に人口が少ないことで、村民同士、また役員と村民がお互いに顔見知りになることができる点である。特に、役員が村民の様子を把握していることで、それぞれに合った個別対応を可能としている点が一番の強みであると言える。役場は、デイサービスセンターなどといった他業種とも連携していて、ケアマネージャーを中心とした情報共有が週に一度行われ、またそれぞれの事業所で研修会などが行われている。

〈現状の課題〉高齢化が進む中で、大鹿村における福祉産業の問題点として、雇用の募集をしてもなかなか人が集まらないという人材不足である。現在、介護関係の資格補助や奨学金制度はあるが、人材不足に対して、特に力を注いでいる対策はなく、中学校に行き進路の相談をする際に、役場の宣伝をするくらいである。また、以前から介護関係の奨学金制度はあったが、大鹿村としても特に宣伝はせず、利用者もいなかった。最近では、人材不足という現状から奨学金制度に力を入れ、PR活動も積極的に行っている。一方で、リニア工業によって環境問題が引き起こされ、人体に影響があるのではないかという村民の懸念もあるようだ。

〈改善策〉人材不足の解消に寄与するものに、移住の際の補助金の支給、空き家紹介、住宅改良の支援のほか、プチ移住計画など観光協会のイベントで移住増加を狙った動きがある。また、村民全員が顔見知りの関係性であるゆえ、一人ひとりのニーズに合ったきめ細やかなサービスが可能であるが、介護や福祉関係の慢性的な人材不足という

苦しい現状がある。そこで、雇用促進案や児童生徒への就業・職業体験などのキャリア開発のほか、Iターン者が働き手増のカギになると思われる。福祉・教育両方の側面から、定住支援や雇用促進、人材育成を強化することを提言する。

#### 【教育】

〈強み〉大鹿村の教育の一番の強みは、小学校・中学校ともに全校生徒が少ないという少人数制を活かした、生徒の主体性や自立を尊重した一人ひとりであった質の高い教育をすることができるという点である。また、全校生徒が少ないため、全学年で触れ合う機会も多く、同学年間のヨコのつながりだけでなく、タテの関わりもある。大鹿村の伝統芸能である大鹿村歌舞伎は、小学校・中学校ともに地域の方々が連携して指導にあたり、発表の機会もある。そして、自然学習やロードレース大会など大鹿村の広大な自然を活かした教育も充実している。大鹿村の大人たちは、地元の人とIターン者を区別しているようであったが、学校ではそのようなことはなく、学校教育が地元の人とIターン者の溝を埋める場にもなっている。また、Iターン者は人口増加の架け橋にもなっている。

〈現状の課題〉現在、大鹿村には高校や大学などがなく、就職先も少ないため、進学や就職が理由で大鹿村から出て行ってしまいうことで人口流出が起こっている。また、一村一校の小中学校で、一学年一学級でクラス替えもないことは9年間同じメンバーで過ごすことになり、男女比の偏りが発生することに加え、多様性が生まれにくいことも課題である。人数が少ないため部活動はテニス部しかなく、習い事をする場合は隣町まで出なければならない。

〈改善策〉村民の献身的な支援のもと、総合的な学習の時間を活用して、独自に展開する中学生歌舞伎は唯一無二であり、誇り

をもつべきである。この強みを、村民一丸で伝統文化として支えることで、文化の継承やアイデンティティの形成にもつながる。また、歌舞伎学習、自然学習などに強みがあることから、少人数制を活かした質の高い教育を目指すべきである。また、進路やキャリア教育の選択肢の少なさの弱みを持っていることから、歌舞伎教育や自然環境体験学習、食育などでキャリア教育を推進することや小中一貫の個別指導など新たな教育方法の開拓を行うことを提言する。

現状評価を基にしたまとめ

今回、福祉と教育の現場それぞれでヒアリング調査を行ったが、しっかりと課題意識をもっていた。そこから村民がより暮らしやすい大鹿村にしたいという想いが見受けられた。1,000名程度の村だからこその強みも多くある。しかし、調査を重ねるにつれて福祉と教育それぞれに強みと課題が存在し、そのどちらにも共通する課題が、「選択肢の少なさ」であった。小さな村でも、村民が幅広い選択肢を持った生活ができるように、大鹿村の特色や強みを活かしながら取り組むことができる改善策が必要である。

# Art Eggs Project (アート・エッグス・プロジェクト)

代表者：荒川ゼミ 小林茂生

## 【1】実施の目的と概要

文部科学省の小学校学習指導要領等を参照すると、現在の日本の小中学校における芸術教育は、造形活動か、もしくは鑑賞活動の、いずれかのみ重点が置かれていることがうかがえる。しかし私たちは、これらの活動以外にも、たとえば作品・作家のリーサーを深めたり、他科目と結びつけたりすることで、芸術教育が、一般社会のなかに私たちの生活が内包されていることを実感する、貴重な体験を与えてくれる価値あるものになると考えている。

だが現実には、芸術は、社会から孤立した娯楽や美の追究活動であると捉えられることが多い。そこで本活動では、芸術を知り、学び、作品を作っていくという一連のプロセスそのものに重きを置き、これを子どもたちに実際に体験してもらうワークショップを行うことにした。

芸術を用いた教育活動については、既に多数の論文や実施事例が存在する。それらについて研究した結果、私たちはワークショップのプログラムを企画するに当たり、Visual Thinking Strategy (以下 VTS)、すなわち「視覚的思考法」という手法を採用することにした。VTS とは、教師が生徒と芸術作品を介して対話をするという教育手法である。1980年代にアメリカで行われた、認知心理学者アビゲイル・ハウゼンとニューヨーク近代美術館教育部長フィリップ・ヤノウィンとの共同研究を発端とし、1990年に具体的なカリキュラムが開発された。こ

れが後に、教材として出版されたものが VTS である。そこでは、美術作品を多角的に捉え、鑑賞者が主体的にその価値や意味を考えることで、芸術に親しんでいくことが目標にすえられている。

VTS のカリキュラムは、幼稚園児から小学校 5 年生までを対象としており、生徒の鑑賞レベルに合わせて 4 種類の教材が用意されている。このうち本活動においては、幼稚園児から小学 2 年生までを対象とした『VTS: Basic Manual Grades K2』の方式を採用した。この方式では、生徒が行った作品の解釈に対して、教師が「言い換え」をすることに重点が置かれている。教師は、生徒の発言の意図を丁寧にくみ取って言い換える。生徒は、自身の発言を教師に言い換えられることにより、発言に自覚的になることが促される。それによって、生徒の発言はより明確になり、生徒自身の語彙力の向上も促される。

このような VTS の基本的構造と、これを実践した過去のワークショップの要項等を参考にしながら、私たちは以下の活動を行った。

\*

まず、当プロジェクトを実施するにあたり、子どもを対象としたワークショップの場づくりについて学ぶために、以下のふたつのワークショップに参加し、その運営に携わった。

1 つ目は、子ども向けの工作ワークショップ「コトニワプロジェクト」である。これは、イオンモールむさし村山という商業施設の

開館10周年を記念して実施されたもので、私たちはこのワークショップの運営に直接加わることで、本番に向けてどのような準備をするべきか、また参加者の方がたどのように接していくべきか等について具体的な示唆を得た。

- ・ワークショップ名：「コトニワプロジェクト」
- ・実施日時・場所：2017年8月11・12日、イオンモールむさし村山内特設会場
- ・参加ゼミ生：9名
- ・ワークショップの内容：5つほどの手数を踏めば簡単に作ることができる、魚釣りセットとえんぴつ花火の制作をサポートした。子どもたちを対象としたものであったが、大人の方、ご年配の方も多数来場されていた。

2つ目は、「まちのわ防災イベント」におけるワークショップである。これは飯田橋サクラテラスにて、防災の日に合わせて毎年行われているイベントで、私たちのゼミは3年前から継続して企画に参加している。来場者が楽しみながら防災意識を高めることを目的としている。

- ・ワークショップ名：「まちのわ防災イベント：防災×アート」
- ・実施日時・場所：2017年9月2日、飯田橋サクラテラス 1階ラウンジ
- ・参加ゼミ生：9名
- ・ワークショップの内容：“防災×アート”を企画テーマとし、未就学児童～小学生を対象に、防災に関する簡単なクイズ（「119番はどこの番号？」など）を実施したあと、親しみを持ってもらえるようなカラフルで実用的な防災グッズとして、「防災ミニまくら」と「LEDライトランタン」の2種類を作るワークショップを行った。

これら2つのワークショップを運営した経験を元に、「Art Eggs Project（アート・エッ

グス・プロジェクト）」と題したメインのワークショップを企画・運営した。

- ・ワークショップ名：「Art Eggs Project（アート・エッグス・プロジェクト）」
- ・実施日時・場所：2017年9月30日、法政大学市谷キャンパス BT0901
- ・参加ゼミ生：6名
- ・一般参加者：3名（女子7歳、女子4歳、男子4歳）および保護者の方がた
- ・ワークショップの内容：ドイツの画家兼彫刻家、詩人でもあるマックス・エルンストの彫刻作品「ロワゾー・ヤヌス（ヤヌスの鳥）」と、フランスの画家、彫刻家、映像作家のニキ・ド・サンファルの立体オブジェ「スフィンクス」の写真を切り取ったものを使用した。これらとA4白紙、さまざまな筆記具を用いて、子どもたちと対話しながら自由に作品を作った。

#### ①アイスブレイク

以前参加したワークショップで効果があったアイスブレイク「あくしゅ」を行った。これは参加者が二人で向かい合って挨拶をし、互いに握手をするものである。

#### ②ワーク1：絵をみんなで描こう

はじめに、エルンストの作品を子どもたちに見せ、「何に見えるか」について発言を促した。これに基づいて、子どもたちが自分の好きなように、この絵の続きを描いてみることを目標とした。この作業は全員で一緒に行った。私たちは、子どもたちが次々に描く絵について、「これは何？」「これはどこから出たの？」などの質問を行った。自分の手を動かしながら質問に回答していくことで、子どもたちは自分の作業を客観的に捉え、それを他者に伝えることを通して、自主的な発言ができるようになった。ここでは先生と生徒といった立ち位置ではなく、対等の目線で会話をを行うことを重視した。

### ③ワーク2：自分の物語をつくる

ここからは、子どもたちがそれぞれ自分の作業を行った。ワーク1と同様、子どもたちが他の対象物や机に気を取られず、また自由に動き回って描くことができるように、床の上に模造紙を広げ、その上で作業ができるよう工夫した。また、年齢の低い子どもたちが使いやすいであろうと考え、クレヨンやクーピーなど、色を塗しやすい画材を用意した。ワーク1では、はじめに子供たちに絵についての質問をしたが、ここではそうしたことは行わず、子供たちは思うがままに絵を描き、最後の発表のときに初めて、絵に対してどういったことを思っているのかなどについて話した。



ワークショップ当日の様子  
参加者3名+ファシリテーター2名。

## 【2】企画実施による結果と考察

本活動の目的は、幼児・児童らが親しみをもってアートと触れ合うことによって、彼らがより多角的な視点を持つことができるようになり、かつ他者とのコミュニケーション能力を向上させることができるようになることを証明することにある。具体的には、アートを用いたワークショップの実施を通して、これらの点を検証した。まず、「より多角的な視点を持つこと」については、「他者の絵に対して感想を伝える際、作品を

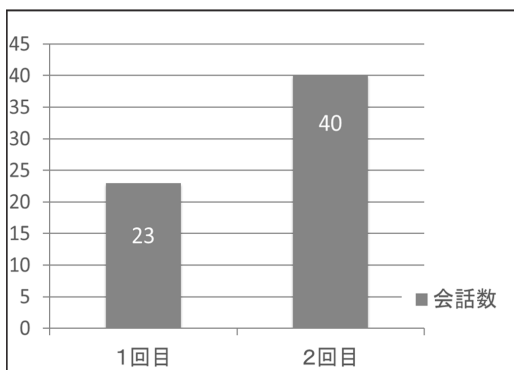
否定するような発言を避け、作品を独自に解釈した結果を伝えること」ができるようになることを目指した。また「コミュニケーション能力の向上」に関しては、参加した子どもたちが、「他者の絵に対して、自分なりの思いや感想を当人に伝えること」ができるよう促した。

このようにアートを介して子どもたちの学びに働きかけを行うことによって、以下のような問題の解決に役立てることができると考えている。まず1つ目は、コミュニケーション能力をめぐる課題である。現在、たとえば文部科学省の「コミュニケーション教育推進会議」でも示されているとおり、世界的なグローバル化の進展に伴って、創造性豊かな人材の育成が求められている。しかし同会議では、近年、子どもたちが自分の感情をうまく表現することができないという課題も指摘されている。本プロジェクトは、子どもたちのコミュニケーション能力の向上のために、ひとつの方法としてアートを活用することが有効であることを示すことができるだろう。2つ目は、たとえば「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告」（文部科学省、2008）にも記されているように、図画工作や家庭科、技術など、主要「五教科」には含まれない教科の受講意義に対する理解が低いという問題がある。私たちは、子どもたちが家庭内や五教科だけでは実現できない、実りある経験を提供してくれる機会として、こうした科目を非常に重要視している。本プロジェクトを通して、芸術科目の大切さを示すことができれば、人びとの認識を変えるきっかけのひとつになることが期待される。

以上のような観点から、アートに親しむことができる姿勢を身につけることが、果たして子どもたちにどのような効果をもたらすのかを、ワークショップの実践を通し

て得たデータをもとに分析した。

データからは、参加者の発言数が、ワークの序盤から終盤にかけて次第に増えていったことが分かった。私たちはワークショップ当日、子どもたちの発話を音声データとして記録し、後日それらの文字起こしを行った。ワークショップが始まって間もない時には、子供たちの発言は「疲れたー」などの独り言のようなものばかりで、誰かに話しかけるといった能動的なコミュニケーションのスタンスはほとんど見られなかった。しかしワークショップが終盤にさしかかる頃になると、個々の発言が、その場にいた他の参加者とのあいだの「会話」へと変わっていった。下のグラフは、ワークショップ前とワークショップ後の発言数を数えたものであり、ワークショップを通して会話数が著しく増えていることが見て取れる。



こうした変化が起こった理由としては、参加者たちが、ファシリテーターである私たち大学生やワークショップの会場に慣れたこともむろん挙げられるだろうが、創造的なワークの内容をこなしていく過程が、他者と打ち解ける手立てのひとつになったためでもあるのは間違いないだろう。

一方、今回のワークショップの反省点として、データの取得方法をひとつに絞るこ

となく、あらゆる観点からの観察を行ったため、結果的に分析結果がはっきりしなくなったこと、またプログラムの内容を事前に作り込みすぎて、実際の参加者に対して臨機応変に対応することができなかったことなどが挙げられる。とはいえ、当日参加した子どもの保護者からは、ワークに集中できる環境が用意されていた点や、参加者の年齢に合わせて誰もが理解できるワークであった点などが高く評価された。

以上のことから、子どもたちがアートと触れ合うことは、彼らのコミュニケーション能力の向上や、アートに対する関心の増大に貢献しうることが確認できた。今後は、より正確な効果測定が可能なプログラムを工夫し、さらに研究を重ねていきたい。具体的には、現在、以下のような改善方法を考えている。

先にも述べたように、今回のワークショップの反省点は、なによりもまず効果が測定しづらかったことである。そこで私たちは、京都造形美術大学で行われている「ACOP（アート・コミュニケーション・プロジェクト）ナビゲーター育成プログラム」を参考に、より適切なプログラムを構築していく予定である。ACOPでは、VTSを活用した美術館鑑賞会のナビゲーターを育成するプログラムを授業内で行っている。運営代表である同大学教授の福のり子は、VTSの代表的な3つの質問「作品の中で何が起っていますか?」「それはどこを見てそう思ったの?」「ほかには何が描かれていますか?」を土台として、以下の分類を設定した。すなわち「受け答え/コメント」「言い換え/パラフレイズ」「結びつけ/コネクト」「情報提供/インフォメーション」「まとめ/サマライズ」「質問/クエスチョン」「焦点化/フォーカシング」の7つである（平野・三宅、2015）。そしてこの分類をもとに参加者に質問を行い、その回答を分析してい

る。

今回の私たちのワークショップでは、子どもたちの自由回答を、自分たちの独自の分類を用いて分析しようとしたため、客観的な効果を明確に判定することができなかった。したがって上記の論文をはじめ、さまざまな研究を参考にしながら、ファシリテーターの発話内容をより厳密に構造化することで、参加者の会話に表れる効果を測定しやすくすることを試みたい。

#### 4 参考文献

- ・塚田美紀 (2003) 「鑑賞教育の可能性を探る」佐藤学・今井康雄『子どもたちの想像力を育む—アート教育の思想と実践』所収、東京大学出版会
- ・文部科学省 (2008.8) 「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告」
- ・平野智紀・三宅正樹 (2015) 「対話型鑑賞における鑑賞者同士の学習支援に関する研究」美術教育学 (美術科教育学会誌) 第36号, pp. 365-373.

ほか

## メディアを通じた異文化交流学習の支援

代表者：坂本ゼミ 伊藤花奈

### 1 実施概要

ユネスコの教育理念に基づき、学生が主体となって国内外の子どもたちのメディアを活用した異文化交流学習を支援することを目指した。

- ①国内小中高校におけるメディアを活用した異文化交流とキャリア教育の支援
- ・ 4月25日 埼玉県立伊奈学園総合高校（担当：伊藤・藤岡・麻生）  
中国大連市立第十六中等学校とのビデオレターの授業支援
  - ・ 4月28日 いわき市立四倉小学校（担当：麻生・藤岡）  
福島県浜通りに位置し津波の被害を受けた小学校であり、同じく津波の被害を受けたインドネシアのアチェと映像を通じた交流の支援
  - ・ 5月19日 法政女子高校（担当：伊藤・藤岡・麻生・針生・内田）  
スーパー・グローバル・ハイスクールの関連授業としての映像制作の授業支援
  - ・ 5月20日 岩倉高校（担当：藤岡・伊藤・麻生）  
iPadを用いた映像制作の授業補助
  - ・ 7月6日 白方小学校（担当：内田・針生）  
アメリカ・及びネパールの小学校との異文化交流の授業補助
- (1)小中高校での異文化交流学習の支援を通して、文化や社会、考え方の様々な違いと配慮と理解、そして技術的な環境の違いを本質から理解することを大切にする。人と人とのコミュニケーションスキルを身に付ける。
- (2)学校の先生や子供たちにとっては、この授業支援を通して、メディアリテラシーの理解や情報モラルを身に付けることにつながる。
- ②東日本大震災の被災地での取材
- ・ 9月1日～9月4日（担当：伊藤・藤岡・麻生・内田・針生・進藤）
  - ・ 9月2日 石巻（伊藤・麻生・藤岡・内田）大川小学校の見学と宮城県青年団連絡協議会の方々への取材・インタビュー  
東松島市大曲地区視察と被災者（岩崎さん）へのインタビュー
  - ・ 9月3日 富岡・川内村（伊藤・藤岡・内田・針生）  
浪江仮設商店街で復興事業を行う三浦さん取材  
上諏訪神社で伝統である西郷獅子舞について、遠藤さん・秋元さん・渡辺さんに取材  
長福寺で住職（矢内さん）に震災時の村の様子について取材
  - ・ 9月4日 いわき



四倉小学校でインドネシア・アチェとの映像を通した異文化交流の授業支援

- (1)実際に被災地に足を運んで、自分の目で見て経験することで、メディアから受けとった情報だけで構築された被災地のイメージを変える。
- (2)映像制作やインタビュー活動を通し、情報受信者から発信者になるという実践の場を通して、メディアリテラシーの実践を行う。

③発展途上国であるカンボジアにおけるメディアを活用した異文化交流とキャリア教育の支援（担当：伊藤・藤岡・針生・麻生・内田・瀬田・進藤）

- ・ 12月18日～12月28日  
12月18日～12月21日 シェムリアップ アンコールワット見学  
アンティエ幼稚園見学 日本の援助によって造られた幼稚園の見学
- ・ 12月21日～12月27日 プノンペン メコン大学 学生と協働映像制作を1週間に渡って行った  
協働映像制作を通し、カンボジアの文化や歴史などについての探求学習を行った  
以下、コンテンツ内容（一部）  
キリングフィールド見学 ポルポト政権下で起きた大虐殺の歴史を学んだ  
トントローチ小学校 市内から車で2時間ほど離れた田舎の小学校で、プロジェクターを用いた授業支援と、iPadを用いてビデオレターを作成の補助

VDTO 小学校 カンボジアの小学校の視察

VDTO 小学校の周りのスラム街取材

- (1)情報メディアとして最も相互理解が可能

なツールである映像を用いて、協働で制作を行うことで言葉の壁を最小限にし、お互いの国の文化や考え方の違いについて理解を深める。

- (2)日本には感じることのできない、カンボジアの現状や歴史がもたらした影響について深く考える。

活動②及び③は、インタビューや取材見学を各5～10分程度で映像としてまとめた。

## 2 結果・意義・所見

- ①(1)東日本大震災の被災地での取材（スキル・結果）

被災地に実際に自分の足で訪れ、目で見て経験することで、被災地の偏見（風評被害）を見直すことにつながった。また、映像制作を行うことによって、現代のグローバル化、情報社会において大切な情報を批判的に見て選択し、発信する力が身に付いた。取材や編集作業を通し、様々なコンフリクトを乗り越える中で、就職活動や、社会にでる上で必要な問題解決能力や、主体的行動力が身に付いた。

- (2)被災地研修とそれを映像化した体験について

「伝える」という作業は、起こった出来事を意味が通じるように並べ、相手に「わかってもらおうこと」である。だから映像制作を行うことで、体験した出来事に対する捉え方が変わり、自分にとってどういう意味を持つのか、どんなものだったのか、認識することができるようになる。伝わり方は、前後関係を整理し、どんな順番で情報を出すのかで変化するから、自分が「どう伝えたいか」を明確にすることは映像制作において必要不可欠である。つまり、映像制作は、体験したこと

が自分にとってどんな意味を持つのかを考えるきっかけになる。体験をただの体験として終わらせるのではなく、「体験したことを捉え直し伝えること」を通して自分の中に落とし込むことに、自分の体験を自分で作品に仕上げるこの意味がある。

②発展途上国であるカンボジアにおけるメディアを活用した異文化交流とキャリア教育の支援

・ 考察

メコン大学の学生との映像制作の過程では、字幕やナレーションを入れる言語能力が伴う作業を通して、コミュニケーションが上手くいかない事のもどかしさを痛感した。しかし、試行錯誤を繰り返しながらも、限られた時間の中で1つの作品を作り上げる事で、良い作品を作るという『結果』ではなく、達成感や充実感を強く感じ、協働映像制作がもたらす意義について体感した。また、この活動で現地の人の食事や生活を体験し、考え方に触れる中で、自分達の持っている考え方や当たり前だと思っていた価値観が覆された。その結果、異文化理解を深めると共に、自分が置かれている状況や環境について改めて考え直す事に繋がる経験となった。

・ カンボジアでの異文化交流

メコン大学の学生と活動を共にする中で多くの異文化に触れ、自分の持っている価値観が当たり前ではないということに身に染みて感じた。日本人とカンボジア人の金銭感覚や衛生環境などは、全く異なっていてカルチャーショックを受けた。これらの異文化を体験することを通して、日本で当たり前に行えることや生活環境に感謝するという意味ではなく、

自分が置かれている状況や環境について改めて考え直す事に繋がり、それぞれの当たり前を受け入れ、理解しようとする異文化理解の重要性に気が付いた。これは、インターネット上で知識を得たり、動画を見たりしただけでは感じるこのできないものである。グローバリゼーションが進む現代で、他の国の文化や考え方を受容し、自国の文化を伝えるスキルは不可欠である。

・ 映像制作が持つ意義

映像制作の目的とは、「体験の言語化」と、「体験の映像化」である。これらの意義は映像制作相互インタビューを通し自分の感じたことを言葉にし、伝えることと、自分の体験をエピソード化する中で自分を捉え直し、自分の考えを深めることである。例えば、キリングフィールドの映像制作は、キリングフィールドの、どの場所でどんな感情を抱き、何が重要であるのかについて考える機会となった。キリングフィールドで赤ちゃんの足を持って木に頭を打ち付けて殺した場所であるキリングツリーや、実際に虐殺に使われた鉈や斧などを見て、この大虐殺の歴史は事実であるのだと実感したということ、動画制作を通して再認識した。さらに、映像制作を通じて、歴史を机上で学ぶだけではなく、実際に訪れ、理解することの重要性を強く感じた。もし、単にキリングフィールドを訪れるだけであつたら、「怖い」や「悲惨だ」などといった感情を体感するに過ぎず、自分が何を考えているのかについて考えることは無かつたろう。編集作業の中で、体験をエピソード化することを通して、自分の考えや価値観を考え、深めることができるのである。

・カンボジア活動を通じた意義，結論

このカンボジア研修を映像化する事を通して、言語の壁や、考え方の相違という困難な状況の中での協働映像制作では、日本では決して感じる事ができない達成感や充実感を感じる体験であった事を理解した。また、自分の価値観が当たり前でない事を体感し、異文化交流の重要性を再確認することができた。つまり、映像化が持つ意義とは、体験から得た考えや感じたものをエピソード化する編集作業を通して、自分がその体験から何を学び、何に意義を感じたのかを再確認する事であると言える。

③地域学習支援の学生やキャリアデザイン

学部の学生、学外の人々、作品を見てもらう人たちにとってどういう意義が生まれたか。

- ・現代のグローバル化、情報社会化において重要な、情報を批判的に見て選択し、発信する重要性に気づく。
- ・普段メディアから受けている情報をそのまま受けとるのではなく、批判的な見方を身に付けることにつながった。
- ・異文化交流を行うことによって人権への配慮、文化的、社会的な環境、考え方への配慮の大切さに気づき、コミュニケーションスキルを身に付けた。

# 大分県日田市上津江における地域づくりの現地調査

代表者：寺崎ゼミ 後藤雄人

## 1 実施概要

### 目的

町村合併が繰り返されるなかで、行政区の「地域」の範囲と、生活に基づく人々の意識としての「地域」にズレが生じている。地域づくりを考える際の「地域」の範囲や射程を捉えなおし、重層化・構造化して考える必要がある。こうした問題意識に基づき、調査を行った。調査対象として選択したのは大分県日田市上津江地区である。現地調査期間は2017年8月31日から9月3日である。

### 事前調査

現地調査の前に、ホームページや先行研究を用いて、事前調査を行った。具体的な日付と内容は以下の通りである。

日程 2017年 7月5日・12日, 8月9日・16日

7月5日

日田市上津江・中津江地区がどういった歴史を刻んできたか、日田市、津江地区のホームページや先行研究をもとに、行政面の遍歴を調査。

7月12日

日田市上津江地区において地域づくりを支える施設の確認。またその施設が上津江・中津江においてどういった役割を果たし、影響を与えているのかに着目して調査。

8月9日

これまでの事前調査を基に、明らかにしたい疑問を選定。～とは何かではなく、どういった関係性が成り立っているかについて焦点を当てた。

8月16日

福岡大学植上ゼミ生が作成した、事前レポートを受け取る。視点の違いに着目しながら植上ゼミの課題意識を確認し、我々の調査課題を明確にする。

### 現地調査（サポートプログラム助成対象）

( ) 内は訪問場所及び時間

8月31日

#### インタビュー調査

- ・地域づくり協力隊 庄野周平・集落支援員 吉井淑美（上津江振興局 15時半～16時半）
- ・Uターン就職者 松上洋一 松上祐子（上津江振興局 16時半～17時半）
- ・福岡大学植上ゼミ生との交流（上津江フィッシングパーク 19時～21時）

9月1日

#### インタビュー調査

- ・日田市立津江小学校・中学校 松本祥一（日田市立津江小学校・中学校 10時～11時半）
- ・株式会社トライウッド 福沢祐子（株式会社トライウッド 14時～15時半）
- ・民泊（タラの芽の里やすこ 農家民宿しらくさ）

9月2日

#### インタビュー調査

- ・ 農家民宿「タラの芽の里やすこ」 宇都宮 靖子（タラの芽の里やすこ 9時～10時）
- ・ 上津江・中津江公民館 鈴木善幸（上津江・中津江公民館 11時～12時）

9月3日

#### インタビュー調査

- ・ 福岡大学植上ゼミ生へのインタビュー

#### 調査担当

- ・ 後藤雄人 地域づくり協力隊 タラの芽の里やすこ
- ・ 鈴木悠太 地域振興局 トライウッド 植上ゼミ
- ・ 長田雄樹 日田市上津江小学校・中学校 植上ゼミ
- ・ 佐藤ありさ 上津江・中津江公民館

#### 報告書作成

原稿提出 1月末日

刊行 2月末日

- ・ 福岡大学植上ゼミと合同で調査報告書を刊行する。

#### その他

- ・ 1月28日（日）

キャリアデザイン学部学生研究発表会において、調査の全体像、具体的な活動内容、知見と考察について報告を行う。

## 2 結果・意義・所見

2016年、私たちのゼミは福島県会津若松市において、どのような地域づくりが行われているのか調査を行った。この調査を通して、地域づくりの意義を考察する際には、1つの視点からではなく、複数の視点から全体像を理解することが重要だと感じた。そ

こで、今回の調査においては、全体像を把握するために、様々な立場の人々にインタビューを行い、彼らの地域的な文脈を意識しながら考察を行うことにした。

### 1. 上津江における意識差

#### ・意識差の要因

敷田（2009）は地域における人の移動に注目し「よそ者」が地域づくりにどのような影響を与えるかについて分析を行った。また樋田（2015）も「地域内よそ者」が人材育成にどのような貢献を果たしているのかを考察した。これらの研究をうけて本調査では「よそ者」を「外から来た者」として、さらに上津江において生まれ育った者を「元より内に住む者」、その二者を結び付ける者を「外と内の橋渡しを行う者」と分類する。本調査の結果をこの枠組みに沿って理解していく。

まず今回インタビュー調査を行った地域おこし協力隊は「外から来た者」であり「外と内の橋渡しを行う者」であった。役場と連携しつつ地域づくりを行っているが、役場で働く多くの人々が「元より内に住む者」であるため、意識に大きな違いがある。例えば「外から来た者」は、より多くのIターン移住者を増やすために、受け入れ態勢を整えることを優先していた。それに対して「元より内に住む者」は、上津江内の住人に対する支援を優先していた。その意識の違いが協力隊の活動を制限するものになっていた。こうした地域的な文脈が、インタビューでは語られた。同じ地域に住んでいるからといって、意識が統一されている訳ではない。こうした枠組みが意識差を生む要因となっている。

#### ・人間関係の軋轢

意識差という点では、農家民宿を営む住人からも同様の文脈が語られた。「タラの芽の里やすこ」を営む夫婦は、Iター

ン移住者である。つまり大都市から移住してきた「外から来た者」だ。「元より内に住む者」が形成するコミュニティには「外から来た者」は入りづらい。住民同士で目的の方向性が異なり一枚岩ではないため、人間関係の難しさが地域づくりに大きな影響を与えていた。

## 2. 人間関係へのアプローチ

### ・公民館主事の役割

こうした人間関係へのアプローチを行っていたのが上津江における公民館であった。公民館主事は、インタビューのなかで公民館の役割には「つどう」「まなぶ」「むすぶ」という機能があると語っていた。「つどう」とはサークル等の自主的活動を支援する構造である。サークルなどのコミュニティ形成を支援することによって、住民の地域づくりに一役買っている。自主的活動、その中でも学習の手助けを行っているのが「まなぶ」機能だ。様々な情報や知見を公民館が主体となって提出することによって、生涯学習の中核施設として機能を果たしている。こうした「つどう」「まなぶ」という機能を応用したのが「むすぶ」である。「世代を超えた地域づくりの拠点」として、時代の変化に対応し人々の多様性を結び付けている。

公民館主事は「外から来た者」であるため、「元より内に住む者」とは異なる視点を持っている。その視点を活かし、イベントを行う際には「外から来た者」が参加しやすいようにハードルを低くしている。伝統的に行われている行事だけに力を入れるのではなく、新しい形での催しなどを考案していた。地域づくり協力隊とは異なる手法で「外と内の橋渡しを行う者」としての役割を果たしていた。

### ・バー「夜明け」

こうした人間関係にアプローチしている

のは、公民館だけではない。上津江にUターン就職を決めた夫妻からその取り組みを聞くことが出来た。自らコミュニティの場を作り、農業を行う姿を見せることによって、以前上津江に住んでいた人々に再び戻ろうと思ってもらえるように活動をしている。使っていない空き家を地域の若手が集まるバー「夜明け」として利用することで、コミュニティの場を作っていた。ただし、同じ人達しか利用しない事や、1度出来た輪の中には入りづらい事などの問題を抱えていることが明らかになった。こうした状況は限定されたコミュニティのみにしか影響を与えない。地域づくりという観点からみたときに、果たしている役割は小さいものとなっている。インタビューを通して語られた文脈から、夫だけがそうしたコミュニティに出向くことによって、妻が残されてしまうことが読み取れた。育児や家事が一方的に押し付けられていたのだ。またバー「夜明け」に訪れるのは「元より内に住む者」やUターン就職者だったため、一部の人間関係にはアプローチすることは出来ているが、それ以外の部分では脆弱性があることが見て取れた。

## 3. 教育者としての葛藤

### ・教員という立場

住民同士の橋渡しだけではなく、都市部への橋渡しという面では、地域に1校しかない学校がその役割を果たしていた。日田市立津江小・中学校である。この学校では、校長にインタビューを行った。学校の取り組みとしては都市部におけるキャリア形成に順応出来るような指導を行っている一方で、1人の「元より内に住む者」としての立場からは、いずれ上津江に帰ってきてほしいという願いを持っていた。元住民としての願いと教育者としての指導が矛盾しているため、葛藤を抱えていた。

#### 4. 結論と考察

同じ地域に住んでいたとしても「外から来た者」と「元から内に住む者」では意識に差があった。「外から来た者」は受け入れ態勢を整え、より多くの人々が居住地として選択出来るような地域づくりを渴望していた。「元から内に住む者」は長年上津江に住んでいるという経験、長年のキャリアから自身の住んでいる地域に手を加える必要性がないと主張していた。こうした意識差や思いの違いが、地域にズレを生む要因となっている。このズレは、インタビューを行った校長先生が抱えていたような葛藤を生む原因にもつながっている。

地域おこしや地域づくりといっても、その地域に住まう方々の目的意識が共通しているものとは決して限らない。人を呼びこむだけではなく、地域住民同士の連携を強化していくことに力を入れるべきである。地域に価値をつけることよりも、まずそうした基盤づくりが重要となる。お互いの

キャリアを否定しあうのではなく、異なる視点を活かして地域づくりという活動に貢献をする必要がある。そうした状況において、地域を牽引していくような存在が必要となってくる。その存在が自治体であろうと企業であろうとも構わない。イニシアチブをとり、「地域」に住む人々を活気づけることが重要になるはずだ。

#### ・参考文献

樋田大二郎,2015,「離島・中山間地域の高校の地域人材育成と「地域内よそ者」」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第59号 pp. 149-152.

敷田麻美,2009,「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」国際広報メディア・観光学ジャーナル pp. 79-100.

増田寛也,2015,『東京消滅 介護破綻と地方移住』中公新書

山下祐介,2012,『限界集落の真実 過疎の村は消えるか?』ちくま新書

## 企業とのマーケティングコラボ

代表者：酒井ゼミ 岡本遊

### 1 実施概要

#### ◆離島キッチンプロジェクト

神楽坂にある（株）離島キッチンと東京六大学がコラボし各大学が1離島をフューチャーし、マンスリーフェアを実施。

私たちが2017年12月の1ヶ月間店舗にて企画を実施するまでを報告書にまとめた。

- ・ 5月27日 離島キッチンにて、佐藤社長とミーティング。
- ・ 6月26日 株式会社乃村工藝社にてキックオフイベント実施。
- ・ 8月31日 立教大学内にてDemoday イベント実施。
- ・ 10月4～6日 2泊3日の日程で、佐渡島で実地調査。
- ・ 10月23日 離島キッチンスタッフとミーティング。
- ・ 11月15～31日 12月のマンスリー企画を予告する冊子状のチラシ配布。
- ・ 11月25日 企画したメニューを実際に離島キッチンにて試食会実施。
- ・ 12月1～27日 離島キッチン神楽坂店にて1ヶ月間マン

スリー企画実施。

- ・ 1月22日 アンケート集計、効果測定  
佐渡島の関係各者へ成果報告

#### ◆CASIO プロジェクト

CASIO マーケティングアドバンスと酒井ゼミがコラボし、セパレートカメラ「FRシリーズ」の新しい価値提案をした。

「#FRだからできること」をキャッチフレーズとしてプロジェクトを展開し、LPを設置。  
<http://www.e-casio.co.jp/shop/e/efrcando/>  
また、プロジェクトを拡散するため、twitter、instagram、youtubeを運用。  
他にもCASIOファクトリーストア幕張店にてイベント開催、神楽坂まち飛びフェスタにて撮影協力を行った。

- ・ 4月27日 CASIOにてミーティング
- ・ 5月19日 CASIOにてミーティング
- ・ 6月2日 CASIOにてミーティング
- ・ 6月16日 CASIOにてミーティング
- ・ 6月下旬 LPリリース、SNS運用開始
- ・ 7月7日 CASIOファクトリーストア幕張店にてイベント準備、撮影、ミーティング



- ・ 7月中旬 LP 更新
- ・ 7月 22日 23日 CASIO ファクトリーストア幕張店にてイベント
- ・ 7月 26日 神楽坂まち飛びフェスタ実行委員会とミーティング
- ・ 8月中旬 LP 更新
- ・ 8月 31日 CASIO にてミーティング
- ・ 9月 25日 CASIO にてミーティング
- ・ 11月 3日 神楽坂まちとびフェスタ撮影協力
- ・ 11月 LP 更新
- ・ 1月 12日 CASIO にてミーティング
- ・ 1月 LP 更新

## 2 結果・意義・所見

### ◆ 離島キッチンプロジェクト

#### 1. キックオフイベント

立教大学と離島キッチンの内装をプランニングからデザインまで手掛けた乃村工芸社のイベント会場にて実施。その際に企業から出る補助金や各大学が1ヶ月間フューチャーする島を決定し、最後に懇親会実施。離島キッチンがどのような変遷を辿り現在の形になったのかなどを知る。ビジネスは失敗から学び成功する事例を学ぶ。

#### 2. Demoday イベント

立教大学にてキックオフイベントからブラッシュアップを続けた自分達の企画を社

会人 20名程度（グーグル、乃村工芸社、博報堂や他にも色々な会社の社員の方々）の前で発表。質疑応答やフィードバックを沢山頂いた。社会人からのフィードバックは普段様々な現場で活躍されているからこそその核心をつく内容であり、非常に勉強になった。また、褒められた部分に対しては自信を持つことが出来た。

イベント後、現在の離島キッチンの課題を「非日常体験（離島キッチンでの食事）による、好奇心の完結」と捉えた。要するに、離島観光衰退の歯止めのミッションを担う役割を果たしきれていないと課題分析した。そのような現状を解決する為に、離島キッチンでお客様に料理を提供する際、生産者の方が島の魅力などを伝える手紙を渡す企画を提案。

#### 3. 実地調査

フェア期間に仕入れたい食材を生産している方へ交渉などをする為、事前にアポを取った。生産者の方と実際にお話しさせていただき、資料などを基に企画の説明や仕入れ交渉をしていると、島内の横のネットワークを広げてくださり、その場で私たちでは調べることができなかった生産者の方々に連絡して下さった。

当日の連絡にも関わらず、忙しい中で時間を作ってくださり、企画である手紙を書いてもらうお願いも断られる事もなく、都会ではあまり経験できない島の方々の優しさに感動した。また、その優しさから私たちのモチベーションも上がり、「人が人を動かす」大切さを体験。

#### 4. 店舗実施

酒井教授から自分達だけで企画を完結するのではなく、人を巻き込みながら色々な視点を持つようにアドバイスを受けた。本学の能楽研究会に店内に提示する能面をお借

りするなどなるべく企画自体が大きくなるように心がけた。

私達は、メニュー、調理法、価格設定、内装、企画の現場のオペレーション等自由にやらせて頂いた。

離島キッチンから事前に、前年度の売上やフェア営業日などから計算し、売上目標を600万円に設定されていた。

結果、営業23日間での売上は6,261,012円で、目標を達成。

## ◆CASIO プロジェクト

### 1. LP、SNS

FRを他社製品との差別化を図るうえで重要な事柄を価値提案する機会が必要だと考えた。中国では一般消費者向けの人気商品であるFRシリーズが日本ではBtoB向けに販売されており、一般消費者向けに販売するためには生活の中で使える例を多く見せる必要があると考えた。

そのためLPをリリリースしてその中で新しい使い方を提案した。実際にはイベントの告知、法政大学野球部のピッチング、ゼミ合宿でのドライブの様子、神楽坂まち飛びフェスタの様子をFRシリーズの様々な機能を用いて撮影した動画を更新している。このLPを見てもらうためにtwitter、instagramを用いて集客を行った。特にinstagram内では「#FRだからできること」を使うこと

で写真が好きな若者層を取り込めるようにハッシュタグや投稿内容を閲覧者が増えるよう工夫した。

### 2. 幕張店イベント

店舗前のイベントスペースを利用して、FRシリーズを実際に体験できるイベントを開催。イベントを体験してもらえよう学生が主体となって呼び込みをしてこれまでFRを知らなかった人々にも認知してもらうことに成功。

「#FRだからできること」プロジェクトの内容とLPのQRコード、SNSアカウントを記載した原寸大のFRのチラシを配布。その結果LP、SNSを閲覧してもらうことに成功。2日間のイベントで計8台のFRシリーズを販売することができた。

### 3. 神楽坂イベント

神楽坂まち飛びフェスタ委員会の方とミーティングをした結果、法政大学生の活動としてアピールすることで認知を広めることになる。イベントでは撮影協力をFRシリーズで様々な角度やパターンで写真、動画の撮影に成功。

その後神楽坂まち飛びフェスタのHPにて写真、動画を掲載予定中。まち飛びフェスタというひとつの題材を様々な視点から撮影しFRシリーズのさらなる価値を提案した。

# 地域産業の活性化プロジェクト

代表者：酒井ゼミ 下池瞳華

## 1 実施概要

本プロジェクトは長野県飯田市と東京都多摩地区の二地域の産業の活性化を目的とし、それぞれの一連の企画を通して実践的なマーケティングの研究を行った。

### 【長野県飯田市の活性化】

長野県飯田市の伝統工芸品である飯田水引の活性化を目的とした神楽坂のイベントでのワークショップ開催や、新商品の企画・販売（※予定）の実施についての報告。

《神楽坂イベント（神楽坂まち飛びフェスタ）でのワークショップ開催》

5月30日 法政大学にて飯田市役所職員・産業センターの方との打ち合わせ

- ・ 飯田水引の現状・問題に関する説明
- ・ 企画内容の共有

6月8日、9日 長野県飯田市への訪問

- ・ 産業センター訪問  
水引組合、飯田市役所職員、産業センター職員と打ち合わせ、企画内容の共有
- ・ 水引販売店大橋丹治訪問 水引作成見学、体験
- ・ 水ひき工芸館せきしま訪問 水引作成体験、博物館見学
- ・ 新商品の色、デザイン決定

6月30日 神楽坂まち飛びフェスタ実行委員会へ企画書提出

8月22日 長野県飯田市への訪問

- ・ 産業センター訪問  
水引組合、飯田市役所職員、産業セン

ター職員と打ち合わせ、企画内容の共有  
9月23日 東京理科大学森戸記念館にて、神楽坂まち飛びフェスタ結団式

10月6日 新宿にて、ワークショップで使用する材料購入

11月3日 12:00～17:00 神楽坂まち飛びフェスタ当日

- ・ 神楽坂毘沙門天境内にてワークショップ開催

《新商品企画・販売》

12月20日、1月17日、1月24日 reboot(シェアアトリエ)にて、東京和紙篠田さんと打ち合わせ

- ・ 企画内容の共有・和紙作り体験

### 【東京都多摩地区の活性化】

東京都多摩地区にある三鷹市の商業施設と立川市の商店街の調査を行い、活性化モデルを提案することを目的とした一連の活動についての報告。

4月13日

- ・ 三鷹コラル データ収集

4月26日

- ・ 三鷹コラル 岩崎さん（三鷹コラル理事長）、角さん（三鷹コラル支配人）ヒアリング調査及び視察調査

4月27日

- ・ 立川北口大通り商店会・羽衣商店街 視察調査 石井さん（振興組合連合会事務局）、堀さん（立川市市役所職員）同伴

5月19日

- ・ 立川北口大通り商店会 宮崎さん（会長）、

北島さん（副会長）、伊藤さん（元会長）  
ヒアリング調査

- ・羽衣商店街 金丸さん（理事長）ヒアリング調査

5月30日

- ・立川北口大通り商店会、羽衣商店街 データ収集

6月10日、22日

- ・三鷹コラル 三鷹駅周辺にて街頭アンケート調査

7月20日

- ・立川市商店街連合会 定例会

8月17日

- ・立川市商店街連合会 定例会

9月21日

- ・立川市商店街連合会 定例会

10月18、20、21日

- ・三鷹コラル 競合店調査

11月10、12日

- ・羽衣商店街周辺にポスティング投函

11月12、22、27日

- ・三鷹コラル 利用者状況調査

12月21日

- ・立川市商店街連合会 定例会

1月6、7、18日

- ・立川北口大通り商店会 立川駅北口にて街頭アンケート

1月19、20日

- ・立川北口大通り商店会 加盟店にアンケート用紙配布

1月25日（予定）

- ・立川北口大通り商店会 加盟店アンケート回収
- ・立川市商店街連合会 定例会
- ・三鷹コラル 成果発表（岩崎さん、平林さん [現支配人] 同席）

2月15日（予定）

- ・立川市商店街連合会 定例会

3月8日（予定）

- ・北口大通り商店会・羽衣商店街 産学連

携活性化提言報告会

## 2 結果・意義・所見

### 【長野県飯田市の活性化】

まずプロジェクトを始めるにあたり長野県飯田市の伝統工芸品である飯田水引の衰退原因を探った。そこで大きな衰退原因として挙げられたものは「人々の生活様式の変化」である。この問題を解決すべく、飯田水引にとってのあるべき姿として「飯田水引に日常的な使用機会があること」を提示し、二つの企画を進めた。

《神楽坂にて開催されるイベント「神楽坂まち飛びフェスタ」に参加し、メッセージカード×飯田水引のワークショップを開催》

ワークショップ参加者がメッセージカードの色と水引の色を選び、メッセージカードを作成したあと、水引職人さん（または私たちプロジェクトメンバー）指導の下作成した水引を括り付けるといったものである。これは1つ500円で販売した。

＜実施から得た結果＞

ワークショップを開催した際に実施したアンケート結果から、現在の水引の利用方法や利用しない理由を調査し、水引に日常的な使用用途がないことが水引の需要が上がらない大きな要因であると考えられることができた。また今まで水引に触れる機会のなかった参加者や、知っていたけれど興味のなかった参加者に、初めて水引に触れる経験や興味を持つきっかけを与えることができた。大規模なイベントに参加することで、多くの人々に知っていただける機会となったと考えている。

《新商品企画・販売》

御朱印帳の流行による神社ブームや20代

から30代女性の縁結びの関心が高いこと、また神社やお寺によく行くかというアンケートで、よく行くと答えた割合が一定数存在することなどから、おみくじが日常的なものであると考えおみくじの販売を企画した。水引の認知はあっても「飯田水引として知らない」人々に対して、飯田市の半八重桜をモチーフにすることで、「水引＝飯田」と認識できることをねらいとした。

<実施から得た結果>

この企画は現在進行中であるため、今日までその企画考案を行ってきている。今後販売予定である水引おみくじの販売と同時にアンケートも実施し、なぜ購入したのかといったところから、水引のどの部分を活かした商品開発が好まれるのか調査したいと考えている。また、ワークショップの際との売り上げを比較し、「ワークショップ形式」と「販売」のどちらのほうが多くの方に水引に興味を持ってもらえるのかなども検証していきたいと考えている。今後もこの企画は継続予定である。

## 【東京都多摩地区の活性化】

<立川市>

北口大通り商店会と羽衣商店街の2つの商店街は対極的な特徴を持っているため、それぞれの商店街に効果的な活性化案を産学連携活性化提言報告会にて提言する。

《羽衣商店街》(以下商店街)

商店街視察後、理事長である金丸さんにヒアリング調査を行った。ヒアリング調査及び商店街のデータ収集を基にポスティング調査を行った。ポスティング調査の結果、商店街に対してネガティブなイメージをもつ人が75%に上った。

しかし、その中でも利用頻度の高い個店が4店舗あり、その共通点はスーパーなどの対抗勢力にはない独自性があることが分

かった。このことから、住民は商店街にスーパーなどにはない独自性を求めており、個店の持つ独自性に価値を見出していると考察した。

<提言内容>

近隣住民の、個店の独自性、魅力の認知度向上

→具体的な解決方法を定め、産学連携活性化提言報告会にて報告予定。

《立川北口大通り商店会》(以下商店会)

羽衣商店街と同様の手段をとり、それらを基に街頭アンケート調査、加盟店調査を実施。街頭アンケート調査より、デパートなどの規模や集客力の大きな店舗は利用されているものの、飲食店はほとんど利用されていない。また飲食店の位置する大通りを通行しない声も多く挙がった。このことから、大通りを通らないため飲食店の存在が認知されず利用されていないと考察する。

<提言内容>

・立川近郊に向けた商店会の認知度向上

・飲食店の存在を知る機会提供

→現在行われている飲食店をメインとしたイベントの改善

具体的な解決方法を更に定め、産学連携活性化提言報告会にて報告予定。

<三鷹市>

立川と同様の調査後、それらを基に街頭アンケート調査、加盟店調査を実施。

街頭アンケートでは、コラルの認知度は高いが利用状況は低く、若者は特に低かった。また、加盟店調査及びヒアリング調査から個店が取り扱う商品や個店自体の変更は難しいことが分かった。このことから、知ってはいるが利用方法が分からないため利用されていないと考察する。

<提言内容>

利用方法の提案

→季節や年代ごとに細かく具体的な使用方法を提案する

1月25日に報告発表を行う。

# 働き方のエキス

代表者：田中ゼミ 椿七海

## 1 実施概要

キャリアデザイン学部として、自分のキャリアをデザインしていくためのヒントを、様々なバックグラウンドを持つゲストを招聘し、学生自身が企画しながら学んでいく。本活動で設定した共通テーマは、「働き方のエキス」である。多方面で活躍するゲストの内的な経験に迫り、働く上での苦労や喜びを相互ディスカッション形式で学んでいた。

本活動は、田中ゼミメンバーが中核となり、企画告知、ゲスト講師への連絡、当日のアテンド、司会進行を担当したが、公開イベントとして位置づけ、各回ともに学部生や他学部生、他大生や高校生の参加もみられた。本活動が計画通りに実施され、多くの参加者とともに実施できたことは、企画代表者としての責務を全うしたといえる。実施した内容は、下記の通りである。4月から12月までにわたるプログラムとして、講演会や、ワークショップを行った。

さらに、本活動の学びをいかし、5月から11月にかけてユネスソーシャルビジネスコンテストに参加し、「働き方のエキス」をいかした新規事業の作成と社会問題解決の提案を行った。

具体的には、障害者スポーツのプラットフォーム事業を提案し、関東の学生が出場する最終コンテストで準優勝をおさめた。

### 「働き方のエキス実施期日と内容」

4月26日 家族留学から学ぶライフキャリア

ア（司会進行：田村真土香）  
新居 日南恵 Manma 創設者  
呉 京樹 クリエイターズマッチ代表取締役社長

4月26日 IT・IoT時代に、企業が求める人材の3つの特性（司会進行：椿七海、浅井裕一）  
志水 雄一郎 Net jinzai bank 代表取締役社長

5月15日 労働環境での身体の使い方（当日アテンド、ゲストサポート：木村実里）  
兼子 ただし 株式会社SSSグループジャパン代表取締役社長

5月17日 企業における女性の活躍の機会（司会進行：丸山愛美）  
日下部 奈々 ソフトバンク株式会社 人材開発 兼 人材戦略部

5月24日 デザイン思考ワークショップ（司会進行：宮内龍汰）  
小林 晴彦 THIRD PARTY INC.

6月28日 現代やこれからの社会状況（司会進行：椿七海、林智美）  
中川 英治 ソフトバンクコマース & サービス株式会社 ICT事業本部 事業推進部 部

- 長  
7月5日 新規事業を立案していく力  
(司会進行：椿七海)  
伊藤 羊一 Yahoo! JAPAN  
コーポレートエバンジェリスト
- 7月12日 顧客が求めていること (司会進行：浅井裕一)  
富永 律子 株式会社 WOWWOW  
営業局 カスタマーリレーション部リーダー
- 7月17日 人をプロデュースしていく上で重要なこと (司会進行：森田怜奈、松本理沙)  
小室 哲哉 エイベックス株式会社 音楽プロデューサー  
佐藤 裕 パーソルキャリア株式会社 新卒採用部 ゼネラルマネジャー
- 10月11日 しくじらない社長のはた楽心得 (司会進行：山下貴史)  
藤堂 高明 株式会社ファストグループ代表取締役
- 11月8日 パラレルキャリアの心得 (司会進行：河西美柚)  
平田 麻莉 一般社団法人プロフェッショナル & パラレルキャリア・フリーランス協会 代表理事
- 12月20日 伝え方の心得 (司会進行：椿七海)  
菊地舞美 日経 BS アナウンサー キャリアデザイン学部卒業生
- 事前準備・企画運営担当：事前準備担当者

が、当日の流れや議論事項の絞り込みを行い、ゲスト講師の連絡と当日の企画代表者との流れの確認を行った。

後藤・浅見・姜担当：家族留学から学ぶライフキャリア パラレルキャリアの心得  
椿・森田・岡崎担当：IT・IoT時代に、企業が求める人材の3つの特性  
木俣・谷口・河西担当：労働環境での身体の使い方

顧客が求めていること

木村・丸山・三島担当：企業における女性の活躍の機会

プレゼンテーション、伝え方の秘訣

林・山下・青木担当：現代やこれからの社会状況

浅井・椿・鈴木担当：新規事業を立案していく力

しくじらない社長のはた楽心得

\* 上記は、各回の企画責任者であるが、基本的には、本活動メンバー全員が協力しながら、事前準備を行い、当日は特段の理由がない限り、全員が参加して積極的に議論を交わした。そうした準備は、ゲスト講演者の方から幾度も、「非常に熱心に参加してくれて、きてよかった。」など高評価を頂けたことにもつながった。

## 2 結果・意義・所見

この講演会を学生自身が企画することによって、連絡の取り方や、モデレーターの仕方など、場を運営するためのスキルが身についた。終了後に自分自身が振り返ることや、ゼミ生がフィードバックする機会を作った。

実際に経験することによって、自分に何が足りないかを知ることができ、今後の活動に活かしていくことができた。本活動を通して得た経験や知見は、大学卒業後に必



要になる、社会人基礎力にもつながっていると考えている。

このプログラムに参加していただく、ゲスト講師の方は、男女や職種など、持つバックグラウンドが、なるべくバラバラになるように、招聘した。業界や職種が偏らないようにすることで、講演会に参加する、多くの人のキャリアのヒントとなるようにした。

そして、参加する人はキャリアデザイン学部生だけでなく、他大学生や、社会人の方にも参加してもらえるように、ポスターを作成し、Facebookなどで、告知活動も積極的に行った。その結果、他大学生や、社会人の方にも多く参加していただけただけでなく、講演会が記事になることができた。講義式にインプットしていく、講演会だけではなく、「デザイン思考ワークショップ」などの自らがアウトプットしながら、学んでいくことによって、参加者が飽きずに、参加することができた。特に、本学部のOG・OBにも参加してもらえたことで、今までは、関わったことがなかったが、その後も、話を聞いたり、自分の参考にすることができた。かつ、新しいつながりを作ることができた。

7月17日に行った、「人をプロデュースしていく上で重要なこと」では、企業と協力しながら、400人以上の参加者に参加していただくことができた。一見、多くの人には当てはまらなそうなテーマではあるが、小室さんの現在だけではなく、学生時代などから、現在をつなげていくことで、参加者も自分に当てはめやすく、話を聞くことができた。企画する私たちは、参加者自らが、話の中からヒントを得られるような、工夫をした。

講演会終了後の参加者の感想では、「色々なお話を聞くことで、スイッチが入った」や、

「今までの考えが変わった」など、様々な反応をいただくことができた。

そして、参加者の中には、話をしてくださった企業のイベントや、インターンに参加する学生もいた。学生が行動に移すためには、何かのきっかけがあると行動しやすい。これは、学生が講演会に参加したことがきっかけで、「何かやらなきゃ」と思って、行動に移せた結果であると考える。

最後に本活動を通して得た知見を2つにまとめたい。

- (1)「行為の継続性」である。仕事で着実に成果を出していくことは、まぐれや運ではないことをあらためて痛感した。どのゲストも、一つ一つ目の前の仕事に丁寧に向き合っている。そうした積み重ねが、大きな成果を生み出している。
- (2)「相手目線を貫いた対応」である。どのゲストの方も、学生である私たちからの連絡一つとってみても、丁寧に返信をくださった。また、迅速かつ的確であることも印象に残った。私たち学生はどうしても、友人関係の上で甘えたコミュニケーションをとりがちである。返信が遅れたり、曖昧な態度をとることなどである。本企画を通じて、社会で働く上で大事な姿勢を身につけることができた。

企画代表者として私は本活動を通じて、成長できたと自負している。本活動で得た経験をもとに、私自身IT企業での長期インターンシップと、長野県塩尻市で行われた地方創生インターンシップに参加してきた。大学の外で働く準備をすすめる大切さと勇気のようなものを、本活動を通して、手に入れることができた。また、学外のソーシャルビジネスコンテストで関東準優勝の成績をおさめたことも、本企画の成果の一つだといえる。企画メンバーと共に、社会に出て行く準備を継続していく。

## ブリッジワン・スタディサポート(都立一橋高校定時制学習支援)

ブリッジワン・スタディサポート／栗田朋季(報告者：伊加拓馬)

### 1 実施概要

#### 【企画概要】

本企画は、都立一橋高校の定時制に通う生徒に対して、相談の専門家でも、先生でもない「大学生」という立場から、キャリア支援を行なうものであり、2015年度に開始された。同校は、単位制普通科・昼夜間3部制の定時制高校であり、生徒の学力のバラつき具合、各々の家庭環境、過去に経験したことなど、通学する生徒の背景は実に多様である。

本活動では、その多様な生徒達に、個別対応で一人ひとりにアプローチする。アプローチの内容は、大きく分けて2つである。1つは学習面。高校の学習範囲はもちろん、中学以前の復習にも対応するつもりである。もう1つは「居場所の提供」である。何気ない雑談や簡単なゲーム、進路や普段の生活に関する相談事にも応じ、生徒が学校に通う(又は通い続ける)1つのきっかけを提供する。

これらのアプローチを通し、我々学生が、生徒と関係性を構築し、そこで得られた生徒の様子をSNS等の情報ツールを用いて、参加学生はもちろん、一橋高校の先生とも情報として共有する。

#### 【企画従事者】

4年：小島日出子、櫻田泰史、中川晴香、服部友紀奈、堀江拓也

3年：伊加拓馬、姜信範、栗田朋季、小林歩乃佳、西島梢、松浦春香、横須賀大輔

2年：栗田侑果、中村海友、光地優作

1年：大久保遙、大澤菜々子、加藤友佳、九重香奈、鈴木茉莉菜、永野晏梨、藤巻佳奈、俣野夏希

以上23名(「お試し」の学生を除く)

#### 【実施期日】

活動は、毎週月～金曜日のお昼休み(12:10～12:50)と夕方(16:00～17:30)に行なう。一橋高校の学期に合わせて行なわれるため、1学期は2017年4月24日から6月29日まで、2学期は2017年9月11日から12月4日まで実施し、3学期は2018年1月10日から2月21日まで実施予定である。これに加えて、各学期末に一橋高校にて、一橋高校の先生や本学の教授も交え反省会を、1学期は2017年8月24日、2学期は12月26日に行ない、3学期は3月5日に実施予定である。

#### 【実施内容】

～活動当日～

まず一橋高校の職員玄関にて、来校記録を記し、来校証を受け取る。

↓

指定された教室で、事前に曜日ごとに申請している生徒に勉強を教えたり、相談や雑談をしたり、生徒の要望に応じてカードゲームを行なうこともある。生徒は事前に申請を出してもらうのが前提であるが、申請している生徒の友人などの飛び入り参加も受け入れている。

↓

昼の時間帯は、12:55から309教室を2部の授業で使用するため、教室を離れなければならない。大学生は一旦ロビーへ移動し、生徒は授業へ行くか、下校するか、ほかの用事を済ませに行くか、引き続きロビーで大学生といるか、どうするかはさまざまではあるが、昼の時間帯も夕方の時間帯も問わず、活動を終了する生徒には付箋にその日の感想を一言ずつ書き残してもらう。大学生も生徒と一緒にその日の感想を書く。

↓

下校時、再び職員玄関にて、来校記録を記入、来校証を返却する。

↓

活動終了後、参加した学生はその日関わった生徒の活動状況を、Facebookの本活動グループのタイムラインに記録する。これは、メンバーと活動に関わっている一橋高校の先生と本学の教授のみで閲覧することができる「秘密のグループ」を用いている。のちに、Excelに転記し、分析に用いる。

#### ～反省会～

各学期の活動期間の終了後、一橋高校にてメンバーと本活動に関わっている一橋高校の先生（担当教諭と副校長）と本学の教授を交えて、反省会を行なう。メンバーが生徒と関わって感じたことや思ったこと、生徒の様子について、活動自体で改善すべきだと考える点を述べ、一橋高校の先生と本学の教授と議論を交わす。そこから、次学期の方針や計画、改善していく点を設定する。

#### ～文化祭への参加～

一橋高校の文化祭「柏葉祭」に、2016年度に続き今年度も参加した。今年度は9月29日、30日の2日間で行なわれた。本活動からの出し物としては、普段の活動でも行なうことのある、トランプやUNOなどを使用

した「カードゲーム対決」や占いを得意とするメンバーによる「占い・心理相談」を実施した。たくさんの生徒、進学希望の親子なども参加し盛況であった。

## 2 結果・意義・所見

はじめに、本活動の結果について述べる。

昨年度からの大きな変更点としては、今年度は毎週月～金曜日のすべての曜日で昼・夕方の時間帯で実施することとなった。今年度からは、昨年度において徐々に一橋高校の生徒の参加数が増えてきたため、4月に入学した新入生に声をかけたり、関わっている本学の教授のゼミ生に参加を呼びかけたりして、大学生のメンバーも増員させた。そうすることで、昨年度は月、火、水、木、金曜日のうち、水曜日と金曜日の夕方の時間帯は実施していなかったが、今年度はすべての曜日で昼の時間帯も夕方の時間帯も実施することが可能となった。

一方で、大学生のメンバー数は増えてはいるが、各曜日・各時間帯に配置されている人員が不足しているという現状もある。生徒の参加頻度（あるいは参加数）が上昇しているためか、活動1回あたりの参加生徒数が昨年度に比べて増えており（少なくとも生徒が誰も来ない日が少なくなった）、大学生が複数の生徒に対応しきれていないという問題がある。

ただ、この問題は、悪い影響を及ぼしているだけではない。良い影響も及ぼしていると考えられる。大学生が複数の生徒に対応するとき、参加している生徒全員で話をしたり、トランプやUNOなどのカードゲームをしたりしている。そうすることで、大学生と高校生間のコミュニケーションだけではなく、高校生間でのコミュニケーションも行なわれる。普段から、大学生よりも高校生の参加数の方が多くなるのが頻繁

で、高校生同士のコミュニケーションも頻繁に行なわれるようになったことで、本活動を通して仲良くなる生徒の姿が見られるようになった。このことは、高校生にとっての1つのコミュニティ、「居場所」としての役割を本活動が果たしていると言えるだろう。

このように、高校生の参加数が増加することは、高校生同士で新たな交友関係を構築することや新たな学校での「居場所」を形成することなどの点で、生徒にとってのメリットとなり得る。しかし、個別で勉強を教えてほしい生徒や個別で大学生と話や相談をしたい生徒が、それをすることができなくなってしまう。これでは、その生徒にとってはせっかくの「居場所」の居心地が悪くなってしまい、活動に参加することから足が遠ざかってしまう可能性も考えられる。この問題を解消するために、現在でも随時本学でのメンバー募集を行なうと同時に、進路指導室に隣接するガイダンスルームを勉強専用に活用することを、二学期末の反省会で決定した。

では、なぜ本活動に参加する生徒の数が増えてきているのか。一つは、本活動に参加している生徒の友人がその生徒と一緒に、正式に学校に参加申請をする前に、教室に顔を出すことがしばしばあることだと考えるが、大きな要因として他に二つあると推測する。

一つは、同活動の立ち上げ時から関与されている先生や進路指導部の先生が、なかなか学校での生活に馴染めていない生徒に声をかけて、この活動を紹介して下さっていることが挙げられる。声をかけられた生徒も、当初はなかなかこの活動に馴染めないことが多いが、ほかの生徒が積極的にコミュニケーションを取ることなどによって馴染むことができるようになってくる姿も見られる。

もう一つは、9月末に実施された文化祭での出店によって、生徒への認知度が上がったことが挙げられる。とくに、「占い・心理相談」の影響力は強く、それを担当したメンバーが参加する活動日は、占いを目的に活動教室まで足を運んでくる生徒が数多く見受けられる。学習支援とは意味合いが若干変わってくるが、高校生にとって大学生と話すというだけでも、何かしらその高校生に影響があれば、意味のある活動と言えるのではないだろうか。今後は、困ったことがあれば「占い・心理相談」に来る、というように、これをきっかけに活動に頻繁に参加する生徒が増えることも考えられるだろう。

次に、本活動に参加している生徒の様子について述べる。一橋高校定時制に通う生徒のバックグラウンドは多種多様で、家庭環境面で課題を有する生徒や、外国にルーツをもつ生徒、学校の学習についていけず苦労している生徒など、さまざまな事情をもった生徒がいる。本活動に参加している生徒の中にもそういった環境に身を置く生徒がいて、苦心している様子を、本活動の中での観察によって見て取れることや直接生徒から相談をもちかけてきて分かることもある。また、そういった生徒に寄り添うことができるといふ思いをもつ大学生も多く参加しているため、Facebookの記録には生徒の様子が事細かに記される。活動の中で生徒がどのように行動し、感じているのかを、大学生の目線で述べる。

ある生徒は、本活動に参加し始めた当初は、人前で話すことが困難で、周囲に人がいることに不安を感じていたように見受けられていたが、現在では、本活動に自発的に参加しており、大学生やほかの生徒と接することで少しずつ会話をするようになり、今では本活動の「常連」となって、みんなを楽しませてくれる存在となった。

ある生徒は、よく昼の時間帯にやってきて、お弁当を食べながら気さくに大学生と会話をする。カードゲームに参加しながら、ほかの生徒をうまく巻き込んで会話をする。この生徒には、大学生も助けられる場面がしばしばあり、この活動に参加する生徒が増えた要因を担っていると言えるほど、頻繁に参加してくれている。しかし、時折定時制と全日制の生徒を比較し、自身の立ち位置を確認する場面も見受けられる。

ある生徒は、普段は大学生やほかの生徒と元気に会話をしており、たまに口が悪い発言をすることもあるが、みんなの前では明るく振舞っている印象がある。ふとした時に対応し難いと感じてしまうほどの込み入った話をすることがある。我々大学生は、そういった話を無理に聴き過ぎないよ

う配慮する一方、本人が話したいことをしっかりと聴いてあげて、一人で抱え込むことなく、それが難しいと判断した時には、一橋高校の先生に相談する、といった対応を冷静に行なうことが求められる。

たった三人を取り上げただけでも多様な人柄であることが理解されるであろうが、参加している生徒は数多く、その参加している生徒たちの話をどれだけ丁寧に聴いて、彼・彼女らの「居場所」をいかにしてつくっていけるかを、我々大学生のメンバーは意識して活動してきた。これからは、年度が変わり、参加する生徒の顔ぶれが変わってくるのが予想されるが、各々が役割と目的を意識して活動に参加することが必要であると考える。

## 聴くチカラ・伝えるチカラを育てよう！ —公共空間での市民的要素を養う授業

代表者：筒井ゼミ 本田翼

### 1 実施概要

年度の同学生サポートプログラム（主権者教育）を引き継いでいる。

#### 【企画概要】

本企画は、都立一橋高校定時制において、「シティズンシップ」（学校設定科目）の授業に学生が参加し、同校生徒への学習活動の支援をするものである。この活動は2015

#### 【実施準備】

以下の日程で授業案の検討及び作成を行った。合同会は法政大学市ヶ谷キャンパス 富士見坂校舎3階教職課程実習室で行った。

9/02 (土)	ゼミ合宿内において、一橋高校の先生2名と顔合わせ、及び学校説明、主権者教育に関して討論実施。今後の合同会等の日程の打ち合わせを行った。		
	合同会	一橋高校の先生の動き	筒井ゼミ(水 16:50~20:00)の動き
10/01 (日)迄		第1回指導案作成	
10/02 (月)	第1回 18:30~20:00		
10/10 (火)迄		指導案修正	
10/11 (水)			ゼミ時間に修正指導案検討
10/16 (月)	第2回 18:30~20:00		
10/27 (金) ~ 11/07 (火)			各自、都合のつく日時に授業見学
11/14 (火)迄		指導案修正	
11/15 (水)			ゼミ時間に直前確認

#### 【実施内容】

以下の日程で実施した。

月日	一橋授業時限	法政の時限	シフト・メンバー
11/20 (月)	7~8時限 (14:40~16:15)	3限 13:30~15:00 4限 15:10~16:40 ※3限開始前に一橋へ移動	姜・伊加・山田・栗田・本田
11/21 (火)	3~4時限 (10:30~12:05)	1限 9:30~11:00 2限 11:10~12:40	古村・光地・荻原・佐藤・本田・横須賀
11/24 (金)	11~12時限 (19:25~21:00)	6限 18:30~20:00 ※5限後に一橋へ移動	中里・高崎・光地・赤間

活動の内容としては、学生はT2、T3 (teacher2,teacher3) として「ティーム・ティーチング」(TT) の要領で授業に参加した。

流れとしては、

① T1である一橋高校の教員が前回の復習、本日の流れなどを説明し、配布資料を配るとともに、授業で行うワークの説明を行う。その後、生徒が班活動できるように5～6班にグルーピングを行い、机・椅子等の位置を変更した。

↓

② 班活動開始後、学生は流動的に任意の班への支援活動を行った。具体的には、ワークの内容を把握できていない生徒へ補足説明、ワークの行き詰った班への声掛け、そもそも話し合いをしていないグループに対するアシストなどである。また、その際には、できるだけ、班の意見を尊重し、意見の出ている班には、意見が出てくるような声掛けを心がけるように周知した。

↓

③ それぞれの班で出た意見は、代表者が発表という形をとった。その際には、各意見をプロジェクターの中にパワーポイントスライドとして映すことによって可視化した。その際に学生は、生徒の意見を聞きながら打ち込んだ。

↓

④ T1の授業のまとめ後に、学生がそれぞれ生徒の前で今日の授業の感想を述べて、授業を終了した。

↓

⑤ 各授業終了後に、授業参加の学生、一橋高校教員、筒井で反省会を行った。反省会ではその日の授業の感想、及び改善点を話し合い、次の授業までに学生(2回目があるもの)、教員双方が反省点をいかして参加するようにした。更に、学生には

当日の感想、反省点、改善点などを含むレポートを、本田宛に提出を義務付けた。

また、各活動で出た生徒の意見はゼミ生有志がエクセルに入力しアフターコードを付けることで数量データにして分析し、授業担当者に送った。

## 2 結果・意義・所見

### 企画実施による結果

本企画の結果をプログラム終了後の参加学生からの振り返りとともに述べる。

第1に、授業後半で行われた、代表者の意見をプロジェクターにパワーポイントスライドとして映すことによって可視化するという作業が、有効に働いていた。

「思っていたよりもPC入力時間に、生徒たちが集中していたように見えた。」

「タイピングをしている大学生に合わせて、ゆっくり発言を行うのも生徒にとっては新鮮なようで、より自分たちの意見をわかりやすいように伝えていたようにも思う。」

といった、意見が多くあった。生徒にとって、自分の意見がプロジェクターに映し出されるということは、自分の意見を聞いてもらえているという自己肯定感を高めることに繋がり、さらには文字が書きだされるある意味動画の様な状況は、注視を促すのに十分であったといえるだろう。この授業における方法は、今後のICT教育において極めて重要な示唆を与えるであろう。

第2に、学生自身のファシリテーターとしての動きについては、改善点や自身の至らなさに関して、自戒する声が多かった。

「話してくれる生徒とはコミュニケーションをとりつつ、プリントを埋めるようなお手伝いができたが、プリント

を全て「なし」で埋めて、話しかけても「ない」しか答えない生徒と関わると、まだまだ自分の至らなさを思い知った。」

「授業に対する意欲の少ない生徒にどのように対応したらよいか分からなかったため、ファシリテーターが上手くいったとは言えなかったと思います。」

上記のように、積極性あるいはコミュニケーションが活発な生徒に対しては、うまくワークの内容に沿った補助をできるが、一方でそういった行動が少なく消極的な生徒にはファシリテーターとして上手くいかなかったという声は多かった。学生自身、こういったファシリテーターとしての活動の経験が豊富であるとは言えないため、上記のような意見が多く出されたと考えられる。

第3に、学生達に求めたレポートには、生徒の作業の内容、進捗状況などに関する記載が多く見られたものの、生徒の内面に踏み込んだような記載は見られなかった。生徒が授業の最初と最後で、考え方や表情に変化は見られたのか、あるいは何か自分が言えなかったことを言っているといった様子の記載は少なかった。

### 企画実施の意義、所見

本企画の名称は「聴くチカラ・伝えるチカラを育てよう！—公共空間での市民的要素を養う授業」であり、意義は、「定時制高校の生徒たちが公共の中で生きる一人の『市民』として社会に参画することを自然体で捉え、かつ、個々人の状態に応じてそのスキルアップを図ることである」と、本学生サポート応募時に書いた。企画全体を振り返った今、今回の内容の総括をする。

まず、改善点として、第3点目に述べたように、多くの学生が、事前に定めたワークの事項を徹底することに専念するあまり、企画の意図を忘れてしまっていたことがあ

げられる。というのも、今回のワークで学生は、ワークに沿った意見がいえるかどうか、ワークが進捗しているかどうか、話し合いが行われているかといった目に見えるものに成果主義的にとらわれていたからだ。しかし、「公共の中で生きる一人の『市民』」であることは、決して、このような、何ができるかということだけで評価されるわけではない。特に学校という場において、授業は生徒の心身を含め総合的に育成を図るものである。佐藤（1996）は授業認識を所定のプログラムの遂行とみなす「技術的実践」と、教室の「今ここで」生起する意味と関りを編み直す「反省的実践」とに分け、後者こそが現代の授業の認識とすべきとしている。今回の企画においても、事実、内定の可否を控えて浮足立つ生徒や、学年が大きく異なる生徒、言語が異なる生徒などがいた。そういった生徒に対して、ワークに無理に参加させるとか、お題に沿った発言を求めるといったのは画一的な授業にしかならないだろう。そうではなく、その生徒が現在抱えている問題をそのまま、「物語」として語りそこから発展させるような展開が必要であったのではないか。

残念ながら、今回学生はモニトリアルシステムの助教の様な授業を円滑に進め、作業工程を効率化する役割しか担うことができなかったように思える。「一人の『市民』」は決して集団の一人ではなく、個性ある一人であり、「公共」もまた個性ある一人の集まりである。そして、それらを理解して初めて「シティズンシップ」が形成されるのではないか。授業の結果を意図して遂行するようなことから、「シティズンシップ」は生まれまいだろう。学生が助教ではなく一人の個人として生徒と話し合うことによってそこに「公共」が生まれるのであろう。

一方で、すべてが失敗というわけではなく、良い点も数多く見られた。普段から生



徒たちと接している一橋高校の先生方からは、いつもより生徒がとても活発に発言しているという所見があげられた。歳の近い学生がいるという、普段とは異なった機会に多く接することで、普段にはない一面が出てきたということだろう。実際に、授業の中では、一橋高校の教員や設備に対する意見が多く出されたのも事実である。

また、結果の第1点目に記載したが、代表者の意見をプロジェクターの中に文字として映す作業は生徒にとって自分の意見が「公共」の場に入り込んでいくということを実感してもらえたと考えられる。このことは、自分が一人の「市民」として社会に参加できているということ、個々に感じ取ってもらえたはずである。さらに、コミュニケー

ションという面で、普段とは違った環境の中でどのようにコミュニケーションをしていくかは、良い意味での刺激になったはずである。このことは、新たな社会に出た時にも通ずる能力ともいえるだろう。

最後に、本企画は継続性が重要であると考えられる。本企画が一時的なものとなれば、一つの授業として成り立つことはあっても、生徒、教師、学生の相互の力を高めていくものとはならないだろう。今回の良い点、悪い点などをしっかりと吟味するとともに、それを引き続き実践していく中で、そこにシティズンシップある一人の「市民」が確立され、そしてそれらの関わり合いを通して「公共」が形成されていくのであると考えられる。

# 島根県中山間地域の高校におけるキャリア教育と 地域づくりに関する研究

代表者：寺崎ゼミ 新谷真央

## 1 実施概要

### ・実施場所

島根県鹿足郡吉賀町。島根県南西部に位置する険しい山々に囲まれた自然豊かな中山間地域。吉賀町に流れる高津川は清流日本一とされており、その恩恵も受け辺りには耕地が広がっている。東京からは、飛行機と車で合わせて3時間ほどの距離である。

### ・活動内容

この活動は、青山学院大学、東京大学、慶応大学の学生らと合同で行った。スケジュールは以下の通りである。

### 事前調査

#### ・事前準備

2017年7月8日（土）に吉賀町事前訪問。1日目と2日目に宿泊する施設と吉賀高校を訪問。吉賀高校の熊谷校長、サクラマスプロジェクト担当の坂田さん、よしか塾NEXTの熊谷さん（東京大学大学院）、吉賀高校に通う高校一年生3人と意見交換及び打ち合わせを行った。（従事者：新谷真央）

#### ・事前学習

現地調査で大学生に期待されている役割および各自の調査課題を明確にする。現地体験する田舎体験の選択後、それについて文献・HP等から学習を進め、現地調査に備える。（学習は各自行う）

現地調査（従事者：鈴木悠太、長田雄樹、鳥海ゆめ、新谷真央、栗田朋季、姜信範）

8月25日

- ・ Web レポート作成（中山間地域の町と中山間地域の高校生・中学生のイメージについて）（各自）
- ・ 吉賀町到着後、六日市温泉ゆららにて、地域の方々によるオリエンテーション

8月26日

- ・ 吉賀高校訪問（担当者：鈴木悠太）  
アントレプレナーシップ教育の中間発表会参加  
高校生と共に地域事業所、農家を訪問
- ・ 柿木中学校訪問（担当者：長田雄樹、鳥海ゆめ、新谷真央、栗田朋季、姜信範）

### 学校施設見学

体育館にてソフトバレーボール（アイスブレイク）

ロケットストーブ作り、それを利用したの昼食づくり

体育の授業（川で泳ぐ）参加（柿木中学校河本校長も一緒に）

進路意識やキャリア意識についての意見交換会

- ・ 地域の産業・教育事業についての学習会

①吉賀高校 PTA（担当者：長田雄樹、鳥海ゆめ）

②吉賀高校サクラマスプロジェクト（担当者：鈴木悠太、栗田朋季、姜信範）

③かきのきむら有機農業（担当者：新谷真央）

- ・ Web レポート課題（イメージの変化について）（各自）

8月27日

・田舎体験

①コウヤマキ自生林観察（鳥海ゆめ、栗田朋季、姜信範）

②手打ちそば（鈴木悠太、長田雄樹）

③林業体験（新谷真央）

・公民館にて地域の方々との交流会

・調査中最終webレポート課題（各自）

（26日の学習会で考えたこと・中学生との交流で考えたこと・田舎体験のどこで吉賀町らしさを感じたか・吉賀町をまた訪問するか・印象に残った田舎体験とその理由、改善点・訪問全体を通して考えたこと）

8月28日

・交流センターにて活動報告会

事後学習

・「自分自身の学びについて」をテーマに参加者全員がレポートを作成。

9月10日レポート提出、10月10日最終レポート提出。吉賀町へ送付済み。

・10月4日青山学院大学にて吉賀高校アントレプレナーシップ中間報告、東京の事業所見学。（従事者：鈴木悠太）

・2月15日には寺崎が吉賀高校を訪問予定。

## 2 結果・意義・所見

企画実施中毎日行ったWebレポートで、その時点の各々の意識や考えを整理し、共有しながら各プログラムに取り組んだ。現地の方たちの話を聞いたり関わりを持ったりした上で、考え方や地域へのイメージ、認識にどのような考え方の変化や学びがあったのかという「過程」に意義があった。

◎吉賀町の中高生の将来設計と地域観

中山間地域についてのイメージとして、東京に住む私たち大学生の中に初めにあつ

たものは、「不自由」「小規模」「後継者不足」「都会から物理的に隔離されている」など、何かが「足りない」状態が多かった。その上で、「足りない」状態から脱し、都会に憧れる若者が多くを占めるのではないかという予想も胸にあった。しかし実際に、吉賀高校や柿の木中学校の生徒たちと関わり、話を聞く中で、都会への憧れや将来は町を出たいなどというような気持ちを抱く中高生はあまりいなかった。「将来は吉賀に住みたい」と話してくれた中学生もいた。しかし、町から一度も出たくないという中高生も、あまりいないのが事実であった。「やりたいことが出来る学校が県内にない」「町の高校にはあまり人間関係が上手くいっていない先輩や友人が進学している（する）」など理由は様々だったが、高校や大学は、町外や県外の学校を志望したいという声が多くある。県内の高校を志望する中学生の中には、「親が高校までは吉賀町にいて、自宅から通ってほしいと言うから」という理由を挙げる子もいた。自宅から通える範囲内にある学校が少なく、選択肢の少なさが中高生たちを悩ませている現状があることが伺えた。

◎町の次世代を担う人材育成と具体的な取り組み

中高校生の将来設計と、吉賀町の目指す「吉賀町の次世代を担う人材の育成」にギャップはあるのか。企画実施前に私たちは、「後継者不足」「少子高齢化」などという現状を「解決すべき課題」であると断定し、「町外に目を向ける、出ていく若者を減らし、町に残ることを推奨する」ことを目指していると予想していた。しかし実際に地域の大人の想いとしてあつたものは、町を一度出ていった若者たちが「戻ってきたいと思える町でありたい。何か辛いことがあつても戻れる故郷があると少しでも思ってくればそれでいい」というものだった。地元

に残ってほしい、と現状や大人の気持ちを押し付けることなく、子どもたちの選択を尊重している様子が見て取れた。豊かな自然や、帰ってこられる故郷の存続のために、後継者不足や少子高齢化は解決していくべき問題であることは間違いないが、町への残留を勧めるのではなかった。町のことを知り、生まれ育った町として大切にする気持ちを育みつつ、中高生たちの選択を後押しする環境を整えていた。

吉賀町内にある柿の木中学校と吉賀高校は中高一貫教育の取り組みを取り入れており、吉賀高校への進学をプッシュする動きも盛んである。しかし、町内からの進学割合は増えていないのが現状である。その理由として、町内で完結してしまう人間関係に不満や疑問を持つ中高生の割合の増加が挙げられる。そこで平成27年より、吉賀高校は県外からの入学者を受け入れている。それは入学者人数の確保という目的の他に、子どもたちや、かつて吉賀町で育った今の大人たちの「町外の人とも関わりたい」という気持ちを汲んだ動きでもある。

吉賀町に住む人々は、中高生が町外に出ることを否定しない。「サクラマス・ドリーム・プロジェクト」という取り組みがある。町外に出た子どもたちが将来、外で学んだものを持って町に戻ってくることで、又は町外で、吉賀町のためになる行動をしてくれるよう、町の子どもたちに教育をするプロジェクトとなっている。町の行事や伝統の仕事、自然への理解や体験の場を設けている。将来吉賀町で働くため、吉賀町に住むために必要な知識や技術を身に着けるために、町外の学校に進学したいという中高生たちもいた。

#### ◎吉賀町が目指す方向性

子どもへの教育以外に、移住者への取り組みも積極的に行われている。Uターン、Iターンの説明会や子育て支援など、暮らし

やすさを感じてもらうためのプロジェクトがここ数年で見直され、実施されてきた。一度町外に出た人が帰ってきやすいような環境づくりも進んでいる。

吉賀町は単発的な観光客を増やして地域活性化を行うのではなく、「住民」を主体とした地域活性化を目指している。かつて吉賀町で育った人や、県外、町内からの移住者を定住させ、豊かに暮らすことが出来るような政策に注力している。吉賀町の現状や未来に対して当事者意識を持った住民同士で、地域活性化に向けて行動を起こしていくことが目指されている。

#### ◎キャリアデザインの観点から

町外、県外に出ていく若者の全員が、新しい人間関係の構築や自らの目標、夢を理由としている訳ではない。吉賀町をはじめとする中山間地域には雇用が少なく、吉賀町に住みたくとも町を出なくてはならない現状がある。住民を主体とした地域活性化を実現させるためには雇用を生み出す必要がある。そこで吉賀高校が行っているのが「アントレプレナーシップ」をはじめとするキャリア教育である。起業や事業拡大など、自ら仕事を作り出す能力を身に着けさせることを目的としている。地域の課題解決のために、地域住民である高校生が中心となり、町の活性化への活動を行う。この活動により、自分のキャリアと町の将来について同時に考えることが可能となる。

吉賀高校から大学進学を志す生徒のために、大学受験に対応できるカリキュラムの構築にも力を入れている。受験タイプに合わせた対策や志望校別の指導が行われてきている。「学習支援室よしか塾NEXT」という公設塾を設置し、放課後の時間を使って生徒たちの志望進路の実現に向け、学習指導を行う取り組みもある。この取り組みは、子どもたちが自由に将来について考え、更には目指すことのできる機会を保証している。

吉賀町には学習塾が1つもなく、学校が中高生たちにとって唯一の学習機会を得られる場所となっていた。その状況を受け、学習支援、学習相談、進路相談などを行える環境を整える動きが、開設に結びついた。元教員や東京大学の大学院生などの力添えを得て、通塾生の負担は利用料のみで学習支援を行っている。町を出る選択をも後押しする環境が整っているということが出来る。

◎今回のプログラムに関して

中学生、高校生との交流や、地域の方々からのオリエンテーション、講演会などで

は、吉賀町の現状を、実際に五感を用いて学ぶことが出来た。そこで得たものの中には、もともと持っていたイメージとは異なるものや、新たな発見もあった。「現地に行かないと分からないものを得て帰ってくる」という目標は果たされたのではないか。

◎今後の課題

住民主体で地域活性に取り組んでいる地域は吉賀町以外でも行われている。その地域と吉賀町を比較することで、吉賀町らしさを浮き彫りにすることができると思う。